

2 生物多様性の現状と課題

第2章では、本市の社会特性や自然環境の特徴を示すとともに、生物多様性の保全と活用における地域区分や生物多様性の現状、主な問題点、課題をまとめています。

第2章

生物多様性の現状と課題

1 本市の社会特性

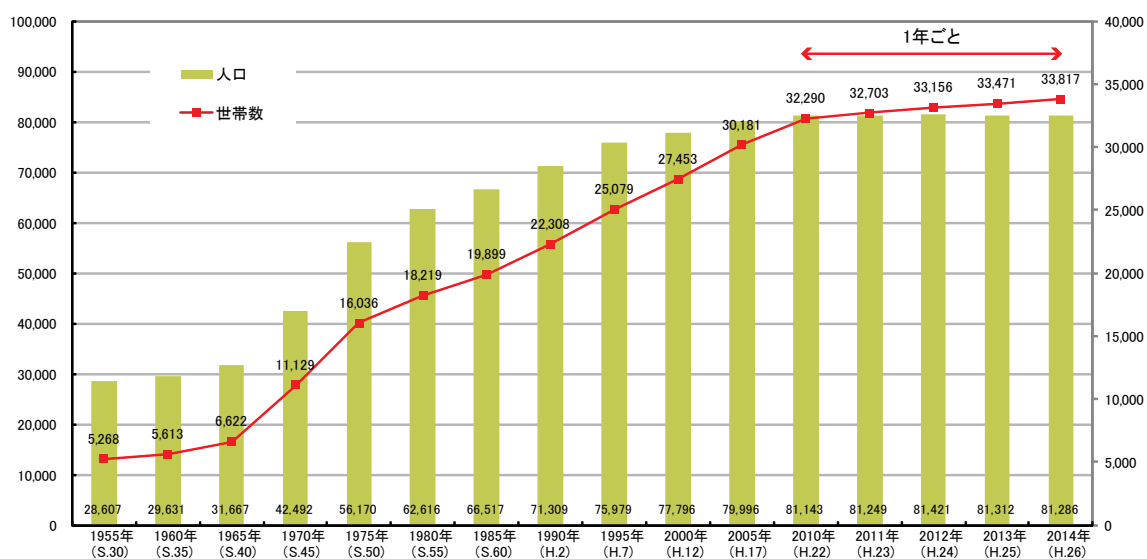


あきる野市役所庁舎からの景観

(1) 人口の推移

本市の人口は、増加を続けてきましたが、2012（平成 24）年をピークにほぼ横ばいで推移しており、少子高齢化の進行に伴い、減少傾向になると推計されています。また、地域によって人口推移に差異がみられ、市街化が進んでいる地域では人口が増えているのに対して、山間部等では人口が減っています。一方、核家族化や高齢者のみの世帯の増加を背景に、一世帯当たりの人口が減少しているのに対し、世帯数は増加を続けています（図 4）。

こうした状況は、森林や耕作地などの生態系を支えている農林業の従事者の減少にも影響していると推察されます。



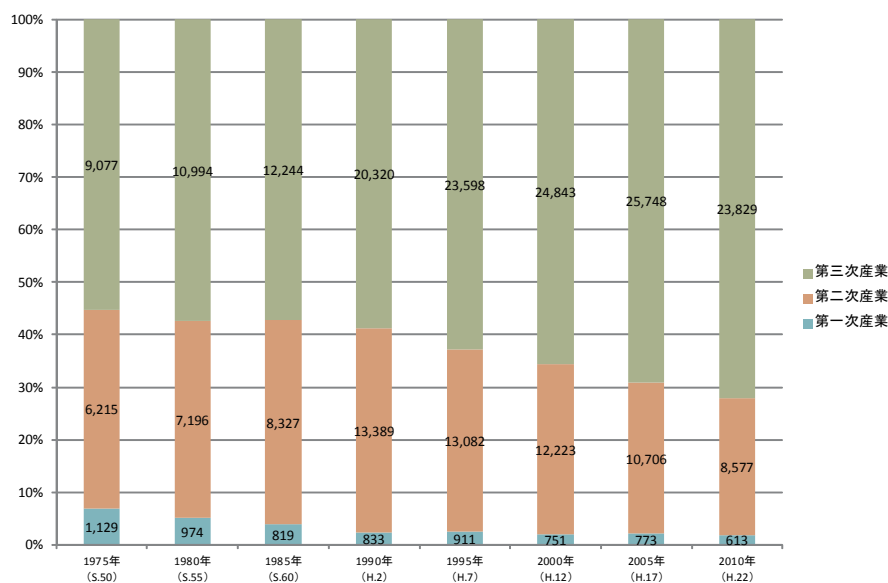
（出典：住民基本台帳などから作成）

図 4 人口と世帯数の推移

(2) 産業構造の推移

本市の産業別従業者数は、第三次産業（卸売・小売業、サービス業など）が中心となっています。

業種別の割合でみると、第一次産業は減少傾向、第三次産業は増加傾向であり、第二次産業（製造業、建設業など）は、1990（平成2）年をピークに増加傾向から減少傾向に転じています。第一次産業は自然環境に働きかける業種のため、本市の生物多様性の保全や活用に大きな関わりを持っているといえます（図5）。



（出典：あきる野統計などから作成）

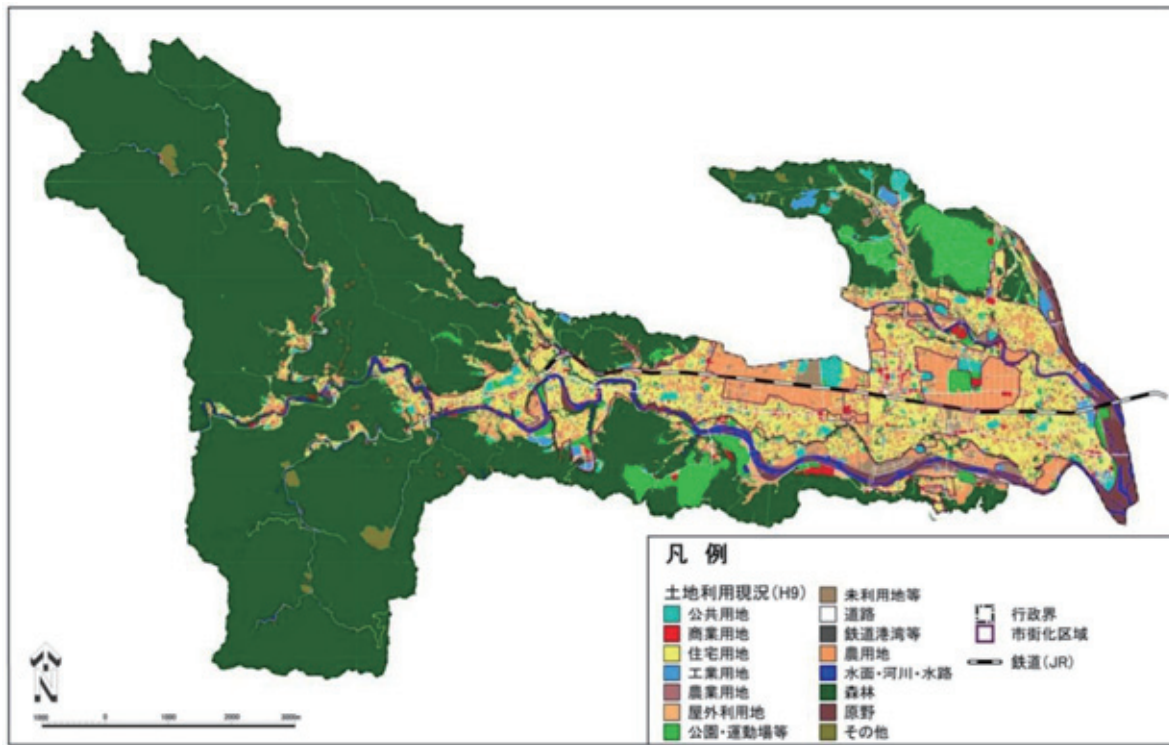
図5 産業別従事人口の割合

(3) 土地利用及び道路整備の状況

市域の約6割は森林であり、緑豊かな本市の特徴となっています。一方、市街地は、台地部を中心に形成され、現在も拡大傾向にあります（図6）。土地利用の現況をみると、自然的土地利用（森林、原野、河川など）が約70%、都市的土地利用（宅地、道路など、その他）が約20%となっています（図7）。

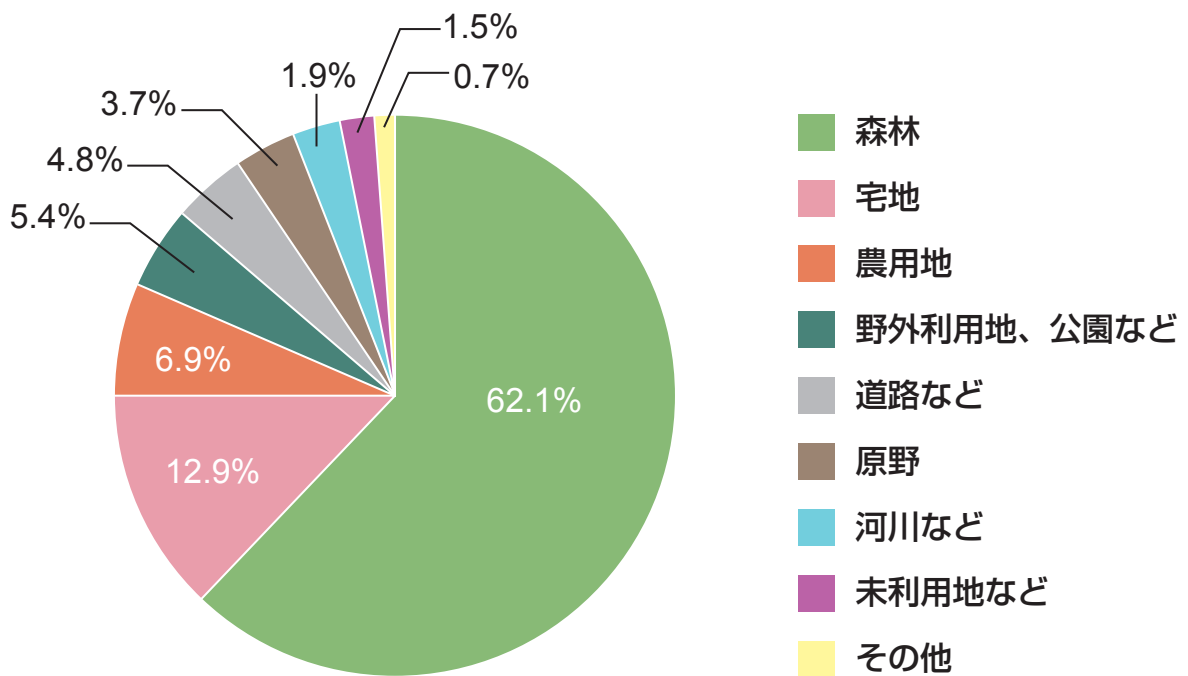
課税上の地目などから、土地の利用状況の変遷をみていくと、本市においても、東部を中心に市街化が進んでいることが分かります。特に農地は宅地化に伴い、大幅に減っており、例えば、かつては原小宮地区（写真14）や二宮地区でみられた農地（写真15）も、現在は宅地となっています。

一方、森林の面積には、あまり変化はみられないものの、かつては広葉樹林が主だった構成から、戦後の拡大造林*により、スギ・ヒノキ林が大幅に増えている状況が認められます。



(出典：平成 19 年度土地利用現況調査)

図 6 2007 (平成 19) 年度土地利用現況図



(出典：平成 19 年度土地利用現況調査から作成)

図 7 土地利用割合



(出典：「写真集 秋川の百年」 1988 年発行)

写真 14 原小宮地区の耕地 (昭和 28 年)



1950 (昭和 25) 年頃



2014 (平成 26) 年

(上 出典：「写真集 秋川の百年」 1988 年発行)

写真 15 二宮地区 (前田耕地) の昔と今

本市の主要な幹線道路網と位置付けられる都市計画道路は 20 路線で、総延長が約 38,620m であり、2014（平成 26）年 3 月 31 日現在の整備状況は 71.7%となっています。

また、段階的に整備されていた圏央道は、2007（平成 19）年に八王子ジャンクションから鶴ヶ島ジャンクションの区間が開通し、中央自動車道や関越自動車道に接続することにより、南北方面の広域的なアクセス性が向上しました。さらに、2014（平成 26）年 6 月には、東名高速道路へも接続され、さらなる利便性の向上が図られています（図 8）。

こうした道路計画についても、今後の生物多様性の保全や活用を進めるに当たり、考慮すべき事項となります。



図 8 都市計画道路等整備現況図

(4) 自然公園の指定状況等

本市の生物多様性の保全につながるものとして、「自然公園法」や「自然環境保全法」、「森林法」、「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」、「東京における自然の保護と回復に関する条例」、「あきる野市ふるさと緑地保全条例」といった法令などがあり、北西部の森林や丘陵部が国立公園や都立自然公園に指定されているほか、東京都による保全地域、地方公共団体や企業との連携による森林の保全などが行われている地域が存在しています（図9）。



図9 自然公園等指定地域図

※サントリー「天然水の森 奥多摩」*は市域外の市有林です。

※自然公園等は、資料編の用語解説に概要を掲載しています。また、横沢入里山保全地域は、コラム8（P.24）をご覧ください。

2 自然環境の特徴

本市は、東京都内にありながら、自然環境に恵まれた地域といえます。現在の自然環境は、本市の成り立ちに加え、地形・地質や植生・植物、動物などの様々な状況関わっています。

(1) あきる野の成り立ち

ア 地球史の中のあきる野の成り立ち

約 46 億年の地球の歴史の中で、市域を形づくる最も古い地層がつくられはじめたのはおよそ 3 億年前からです。この時代は古生代後期のペルム紀や石炭紀と呼ばれます。本市が化石の宝庫であることはよく知られていますが、この古生代の地層からも多くの化石がみつかっています（図 10）。養沢地区の三ツ合鍾乳洞ではペルム紀のフズリナ*やウミユリ*、サンゴなどの化石が産出します。ペルム紀は 2 億 5100 万年前に終わり、中生代に移ります。恐竜やアンモナイトなどが栄えた時代のはじまりです。本市の多くの山々は、この中生代の地層が変動してできたものです。それらの地層はかつて日本海溝付近の海底に徐々に堆積した^{されき}砂礫や火山灰、生きものの死骸であり、太平洋のプレート*の動きにしたがって日本列島近くまで移動し、大陸の地塊*とぶつかります。プレートの上の地層は、押されたりひずんだりしながら幾つもの断層をつくりました。市域の中生代の地層はこれらが構造的に積み重なってできたもので、付加体*と呼ばれます。硬くしまった緻密な岩石が多く、地質図（P.42 参照）でみると秩父帯とあるのは主に中生代ジュラ紀の付加体、四万十帯の小仏層群は白亜紀の付加体です。また、深い海底に積もった放散虫*の死骸は、チャート*という極めて硬い岩石となり、侵食*されにくいため、岩峰*や崖などをつくります。養沢地区の大岳沢にある小滝などがその代表です。

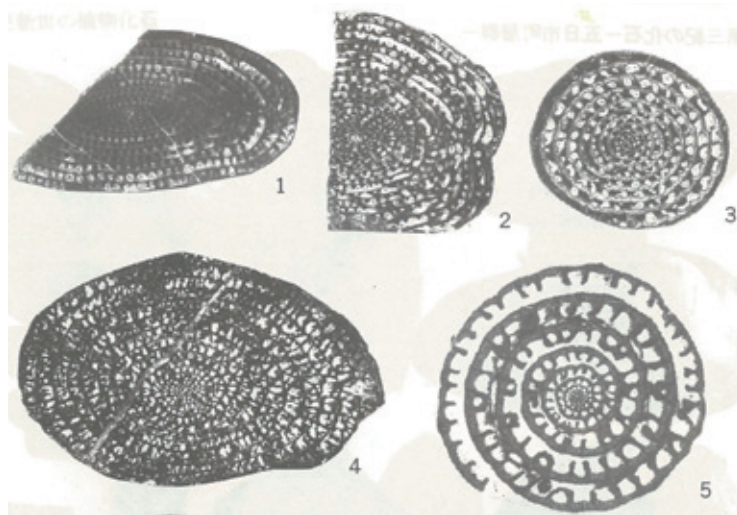


図 10 本市で出土したフズリナ化石

- (1. *Pseudodolina ozawai* あきる野市三ツ合
- 2. *Pseudodolina pseudolepida* あきる野市三ツ合
- 3. *Neoschwagerina* sp あきる野市三ツ合
- 4. *Yabeina* sp あきる野市上養沢
- 5. *Parafusuklina* sp あきる野市三ツ合)

(出典：「日曜の地学 4 東京の自然をたずねて」大森昌衛監修、築地書館より)

中生代が終わると、哺乳類の時代ともいわれる新生代が始まります。新生代は、生きものの進化の歴史を反映して、第三紀と第四紀の二つの時代に大別されます。今から約 6550 万年前に恐竜が絶滅して中生代白亜紀が終わり、新生代第三紀が始まります。第三紀は 2300 万年前までの古第三紀とそれ以降の新第三紀に分かれますが、市域で見つかる地層は新第三紀のもので、新第三紀の前半に五日市盆地、新第三紀の末期に草花丘陵、秋川丘陵（加住^{かすみ}丘陵）をつくりました。五日市盆地の地層は、五日市町層群と呼ばれる海の底に堆積した海成層*です。この時代、関東山地は隆起をはじめますが、関東平野はそのほとんどが海であり、五日市付近は海が深く湾入した入江になっていました。この海は次第に土砂の堆積により埋まり、五日市における海の時代が終わります。この時代の最後に堆積したのが中世以降、石臼や石塔などに加工され流通していた伊奈石を産出する伊奈砂岩層です。

一方の丘陵の地層は、新第三紀の終わり頃、隆起する関東山地を侵食して勢いよく流れ下る川によって押し流された大量の砂礫が、当時の本市付近にあった海岸付近に厚く堆積したものです。秋川丘陵（加住丘陵）や草花丘陵の崖で見られる丸い礫は、現在の河原の石ころとよく似ていますが、現在の川の力ではなく、この時代の河川によって上流の山から運ばれてきたものです。

イ 過去 100 万年の歴史

地質学上の区分では 258 万年前から、第四紀がはじまりますが、ここでは「100 万年前」以降の自然史についてまとめています。この第四紀は地球の歴史からみればとても短い時間ですが、それでも私たち人類が登場するのはおよそ 20 万年前で、縄文時代のはじまりが 1 万年前ですから、人間の歴史と比べればとてつもなく長い時間が流れていることが分かります。私たちが今、目にすることができる本市の自然の特徴はこの時代に完成したものであり、この時代の自然の成り立ちを詳しく知ることで、本市の現在の生物多様性がどのように支えられてきたのか、またどこを大切にすることが必要があるのかが分かります。

第四紀は、寒冷な氷河期とその間の暖かい時期である間氷期とが繰り返されながら現在の自然環境を形成しました。その代表が、市域では多摩川や秋川によってつくられた河岸段丘*です。氷河期になると、寒冷化した地球では陸地に今よりも多くの水が氷として貯えられます。その結果、海水は減るので海水面は低下します。一方の間氷期では気温の上昇により、陸上の氷が溶けて川から海に流れ込むなどし、海水面は上昇します。このような海水面の変化が河床の高度の変化につながります。河岸段丘はこのような河床の高度変化や気候の違いがもたらす降水量の増減があいまって、山から大量の土砂を運んで堆積したり、それを浸食したりという繰り返しの作用によってつくられます。河岸段丘が何段もあるのは、この経過が繰り返されたためであり、段丘面は基本的に高いほど古くなります。また、関東地方では、第四紀に富士山や箱根火山が何度も大きく噴火して、たくさんの火山灰が降り積もりました。この火山灰が風化したものが関東ローム層です。火山灰は、その時点で形成された河岸段丘の上に堆積するので、段丘をつくる川から運ばれた砂礫層の上にローム層が乗っているという形態が、市域の現在の平地や台地の地形の基本型となっています。その基盤の上に豊かな動植物の営みが成立している、すなわち「生物多様性が保たれている」といえます。

このように第四紀という時代は、寒冷な氷河期、温暖な間氷期というように頻りに気候を変動させながら現在に至っています。最後の氷河期（最終氷期）の終了が約 1 万年前ですから、その後、人類が大きな影響を自然環境に及ぼすようになった現在にかけては間氷期となります。現在、本市に生息・生育している動植物の多くは、かつて寒冷な時期には生息・生育場所を南下させたり、また、温暖期には北上させたりすることで、この気候変動の結果生じた自然環境の変化に対応してきました。切欠地区、高尾地区などでみられるカタクリは、寒冷な時期に生育場所を南下させたものであると考えられ、最終氷期の名残りともいえるべき存在です。

コラム10 カタクリはどうやって生き残った？

現代の気候下でなんとか生き残ってきたと考えられるカタクリですが、かつて本市周辺には多くのカタクリが分布していました。

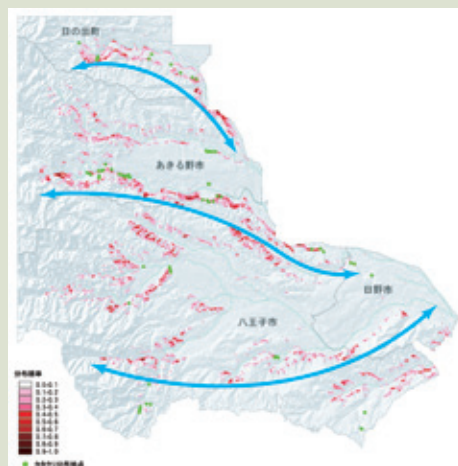
下の地図（ポテンシャルマップ）は、1970～80年代のカタクリ分布地点情報（あきる野市在、故鈴木由告氏調査）をもとに、カタクリがどのような環境要素との結びつきが強いのかを地理情報システムにより解析した結果です（増澤直ほか 2004）。

地図上で、赤い色がついているところはカタクリの分布する可能性がある場所を示し、色が濃くなる場所ほど分布の可能性が高くなります。また、黄緑色の点は分布情報のあった地点です。この地図から、カタクリの潜在的な生育地は、秋川、多摩川などの大きな河川に沿った北向きの斜面に連続しており、現地調査時点のカタクリの分布は、すでに断片的となっていることがわかります。

現地調査時点でカタクリがみられる場所は、現在残存するカタクリの生育条件である北向きのなだらかな沖積錐*で、植生が雑木林である場所とほぼ一致しています。現在の気候下ではぎりぎり生育できる環境にあるカタクリですが、かつてはこの図が示すように好適地の連続性を維持しながら、気候が暖かくなると分布をより高標高の山地側へ移動し、寒冷期になると平地側へ分布を拡大するといった営みを繰り返しながら、氷河期から現在に至るまで生き残ることができたのだと考えられます。



切欠のカタクリ



カタクリのポテンシャルマップ

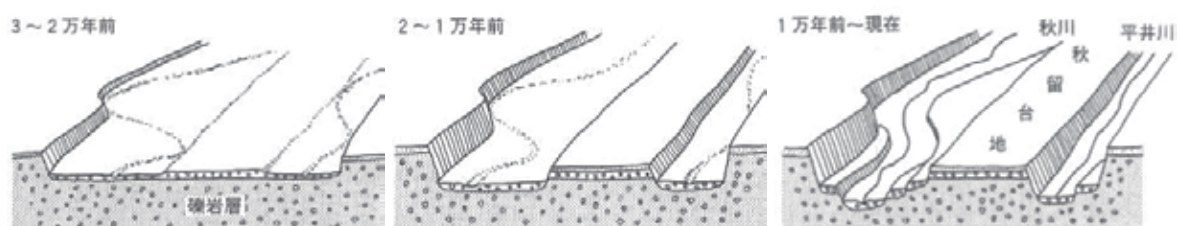
出典：増澤直ほか「カタクリの潜在生息地の推定ー地域の生態系保全へのGISの活用ー」, 第51回日本生態学会大会講演要旨集(2004)

ウ 秋留台地の湧き水と集落立地

秋留台地はかつての秋川が多くの砂礫を運んでつくった河岸段丘の一番高い面で、現在の秋川の河床からは 30 ～ 40m も高くなっています。この高い台地面は武蔵野台地と並んで水が乏しく、昔から畑作しかできませんでした。現在では市街地が広がりつつありますが、40 年ぐらい前は一面の畑が広がっていました。かつての集落は、生活に必要な水がすぐ得られるよう、秋川や平井川の近くに立地しており、秋留台地にはほとんどみられませんでした。

一方、河岸段丘の段丘面からは、湧き水を得ることができます。現在のところ、河岸段丘は 7 ～ 8 面が確認されており、一番上の面（秋留原面）から一段下がった段は、秋川の河床からはかなり離れているものの、とても豊富な湧き水が得られます。

秋留台地をつくる地層には、秋川の河岸段丘を構成する段丘礫層 * とさらに下に黄褐色の同じような礫層がみられます。段丘礫層はまだ未固結で透水性が良いのですが、この下の礫層はその一部が粘土混じりで硬くしまっています。この層は地下水を通さないで、この境界で地下水が湧き出ます。一番上の面（秋留原面）の段丘礫層は厚さが 8m もあり、地下水面の水を利用することができなかつたため、畑にしか利用できませんでした。しかし、それより下の段丘面では 1 ～ 2m 下で硬い礫層がみられ、地下水が得られます。この礫層は秋川丘陵（加住丘陵）や草花丘陵をつくった新第三紀の堆積物と同じものです。100 万年より前に堆積したこの地層は、秋川によって約 3 万年前までに、現在みられる標高ぐらいにまでに削り取られてしまいました。その後、2 万年前からの最終氷期になると気候の変化で梅雨や台風などの集中豪雨が減り、多くの砂礫が堆積して現在の秋留台地の元をつくりました。そして約 1 万年前に氷河期が終わると、温暖化とともに降水量が増加して川の浸食力が増し、段丘面をつくりながら河床を低下させ、現在私たちが目にしている河岸段丘をつくりました。河岸段丘は第三紀の礫層を切りながら河床を下げていったので、秋留原面よりも下の段丘面では豊富な地下水が利用できたのです。二宮神社のお池や八雲神社の湧き水がその代表です。



（出典：小泉武栄（1996）：秋留台地の湧き水と集落立地、「多摩のあゆみ」、83、17-20）

図 11 あきる野市付近の河岸段丘の発達模式

エ 生きものを支える段丘崖の湧き水と緑

本市の湧き水は野辺面、小川面などの段丘崖*（「ハケ」とも呼びます。）から湧き出したものです。段丘崖の急な斜面は人間にとっては家を建てたり畑を拓いたりするには適していなかったため、古くから樹林として守られてきました。現在では、市内の重要な緑の拠点となっているとともに、鳥類や哺乳類などの動物の棲みかや移動経路となっています。また、私たち人間にとっても美しい景観を提供するなど大変貴重なものといえます。本市の湧き水が枯れることなく現在もみることができるのは、湧水地を取り巻く段丘崖の植生と、地下水をかん養している秋留台地の耕作地や丘陵地の樹林が維持されてきたことが要因であり、そのことが本市の生物多様性を支えてきたといえます。

(2) 地形・地質

(1) のあきる野の成り立ちに沿い、ここではその分布に焦点を当て、地形・地質について整理します（図12）。

市域の北西部は、秩父帯と呼ばれる主に中生代ジュラ紀の古い地層から形成されています。秩父帯の中には、本市の最高標高である^{あくば}芥場峠付近（1,067m）も含まれており、市の西端から養沢川流域、秋川流域を経て、武蔵五日市駅近くまでの広範囲に及んでいます。

市域の南西部は、四万十帯の小仏層群で、白亜紀の終わりの頃の地層です。その分布は秋川の支流である盆堀川流域全体に及んでいます。

これらの中生代の地層はとても緻密で硬く、川はあまり河原を広げられずに山を下へ下へと侵食します。その結果、これらの地域の山（関東山地）はとても急しゅんな山容*となっています。

一方で、市域の北東部、南東部は、丘陵となっており、北東部が草花丘陵、南東部が秋川丘陵（加住丘陵）となります。この地層は数百万年前の新生代の新第三紀の後半に当たる鮮新世の末期に堆積したものです。そのためまだ軟らかく、崩れたり侵食されたりしやすいため、関東山地と比べると比較的なだらかで、たくさんの谷がみられます。

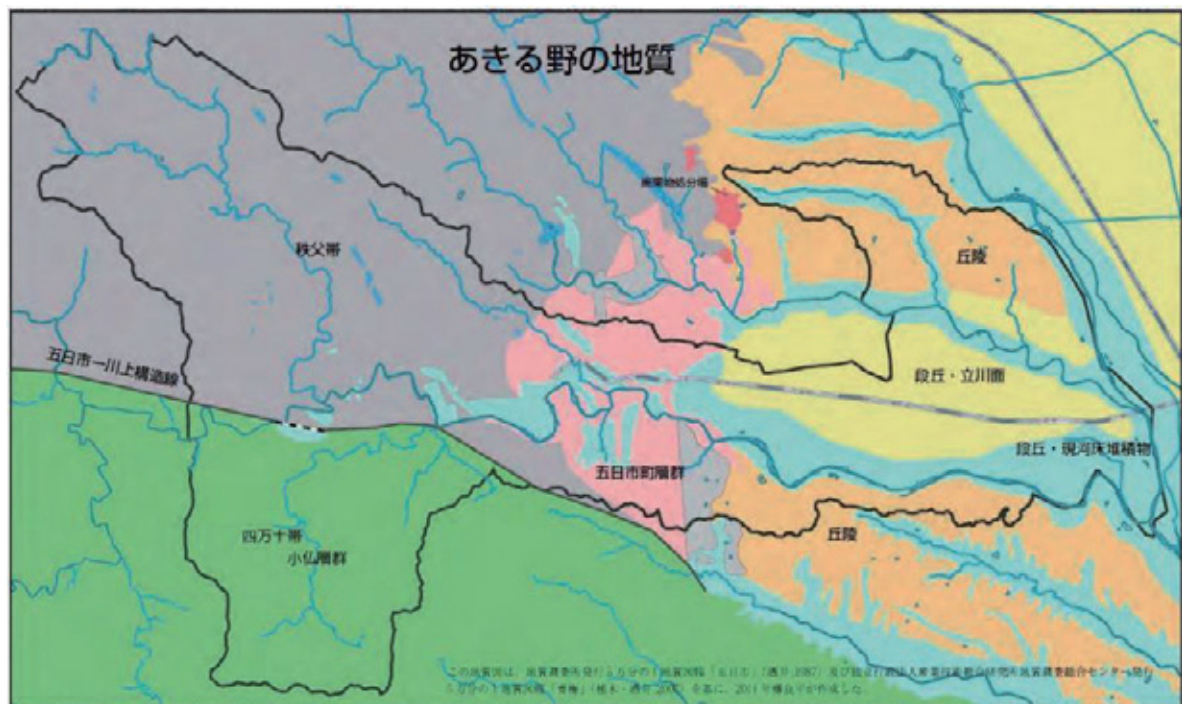
また、市域の中央部は、五日市町層群と呼ばれ、数千万年前から数百万年前の新第三紀に堆積した海成層です。この地層が元になってできたのが五日市盆地です。秩父帯の関東山地を流れ下る秋川は、谷の迫る滝や溪流にはじまり、五日市盆地に入ると河原が広がり、せせらぎやバーベキューでにぎわう河原などに変わります。このような本市の山地や丘陵の地形・地質は、四季折々の美しい景観を形づくる花木などの礎となっており、

秋川渓谷の大きな魅力を創出しています。

市域の東側中央部は、段丘・立川面と呼ばれ、本市の語源の一つともなった秋留台地となります。これは新第三紀にできた地層が、258 万年前から数万年前の第四紀の更新世に、多摩川の支流である秋川と平井川に削られて形成されたもので、大局的にみれば古い多摩川の段丘面であるといえます。

市域の中央部から東部にかけての河川沿いの地質は、1 万年前から現在に至る完新世に堆積したもので、現在の河川によってつくられた一番新しい河原の沖積低地 * です。

このように、本市は山地から低地までバリエーションに富んだ地形・地質があり、地域ごとの美しい景観を形づくっています。これだけ多様な地形・地質を有する地域は東京都内でも珍しいものであり、これをまちづくりに活かしていこうとする取組が「秋川流域ジオパーク構想」となります。



この地質図は、地質調査所発行 5 万分の 1 地質図幅「五井市」(酒井,1987)及び独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター発行 5 万分の 1 地質図幅「青梅」(植木・酒井,2007)を基に、2011 年樽良平が作成した。

図 12 あきる野市の地質（自然環境調査報告書より抜粋）

コラム11 ジオパークとは？

本市では、日の出町、檜原村と共に「秋川流域ジオパーク推進会議」を立ち上げ、三市町村の貴重な「化石や地層などの地質遺産」を保全するとともに、流域の新たな観光スポットとして整備することにより、「ジオパーク」として認定されることを目指しています。

「ジオパーク geopark」とは、地球上の科学的に貴重な自然（地形・地質や景観などの自然物）を活かして広く多くの人々が自然に親しむことができる公園のことです。「ジオ」はギリシャ語の Gaia から発したもので本来は「大地、あるいは水や大気、生物などを含めた地球全体の自然」を現す言葉です。したがって「地質」だけを指すものではありません。日本語では「大地の公園」と訳されることがあります。世界ジオパークになるためには、まずジオパークを目指す地域団体を設立し、日本ジオパーク委員会への申請のもと、日本ジオパークとして認定されることが必要です。さらに日本ジオパーク委員会から世界ジオパークネットワークへ申請し、世界ジオパークとして認定され、はじめて「世界ジオパーク」となります。現在日本では6つの世界ジオパークと27の日本ジオパークが認定されています。

ジオパークは、単に貴重で特徴的な地形や地質を守っていれば認定されるものではありません。地域の地形・地質だけではなく、生態学的な価値や考古学的な価値、歴史や文化的な価値をジオサイト※に含む必要があり、またそれらを地域の自治体や市民、企業、団体などが関わる組織がしっかりと運営していくことが求められます。こうしたことにより、地域の地形・地質を保全するとともに、その自然の価値や特性を活かした教育活動や経済活動（ジオツーリズム等）を推進して、地域の持続可能な経済発展に貢献することが必要なこととされています。

本市の周辺には特筆すべき多様な自然（地形・地質や生物多様性など）があり、ジオパークに適した地域であると考えられます。

ジオパークは、保全と活用を両立させることが大切とされており、秋川流域ジオパーク構想の取組を進めていくためには、ジオパーク運営を担う地域の活動主体の存在が非常に重要であるとともに、地質遺産の保全と地域振興に役立つ人材の育成が必要です。

※ジオサイトとは

地形・地質、歴史など、そのジオパークを特色づける見学場所や拠点となる博物館のこと。例えば、地形の景観、岩石や化石がみられる崖、歴史建造物、植物の群生地などとなります。

(3) 植生・植物

本市の植生現況を表す植生図は、東京都が2007（平成19）年に作成した植生図をベースに本市自然環境調査の結果を反映したものです（図13）。これによると、森林は市域の西部、旧五日市町域を中心に広がり、スギ・ヒノキ植林が最も広い面積となっています。

本市では、人の手に依存しない原生林と呼べるような森林は現存していませんが、山地帯（冷温帯）の標高がおよそ600m以上の養沢川上流域では、比較的自然性の高いミズナラ林が残存しています（写真16）。そのほか、痩せ尾根*にはツガ林が、渓谷には小規模ながらサワグルミ林が成立しています。同じく溪流部の清流と苔むす岩石などが織り成す「ロックガーデン」にはナルコスゲ群落*が、岩壁にはイワナンテン群落*が特徴的です。山地帯の二次林としては、盆堀川流域の戸倉三山*の山腹を中心にしたミズナラ・コナラ林がその代表です。

暖温帯の森林は、本来は常緑樹*が主体となりますが、そうした森林はみられず、深沢地区のウラジロガシ大木に名残りをみることができくらいです。丘陵地では、コナラを中心として、イヌシデ、アカシデなどのシデ類がよく混生する二次林、いわゆる雑木林が広く残存しています。その一部はゴルフ場などに変わっていますが、それらを含めてあきる野の里山を代表する植生景観といえます。雑木林も場所によって少しずつ様相に違いがみられます。草花丘陵では、かつての里山利用を彷彿*とさせるコナラやイヌシデ林が広がる一方で、林床*にはヒサカキなどの常緑樹が増えつつあるなど、多摩地域の自然植生である常緑樹林への遷移*過程がみられます。



写真16 山地帯に生育するミズナラ林

※あきる野市の植物について、より深くお知りになりたい方は「知って守ろうあきる野の自然」「自然環境調査報告書」をご覧ください。

秋川丘陵（加住丘陵）では、草花丘陵と同様にコナラの林が連続して存在し、その中にモミの大木やヤマザクラが散在しており、多摩地域の典型的な景観がみられます。

さらに、秋川沿いには、段丘崖を中心に残存した樹群としてケヤキ林が広がっています。段丘を構成する砂礫層は、水はけが良く比較的乾いていますが、常に水分条件は良い環境です。段丘崖では透水層からの湧き水が多数確認できます。ケヤキはこのような場所を生育の場としており、大木のケヤキ樹群が成立しています。また湧き水の存在はそこに生息する動物たちにとっても貴重なものとなっています。階層構造の発達したケヤキの樹林がベルト状につながることによって、鳥類や哺乳類などの生息の場となるほか、移動経路として機能しています。このような崖線の緑地帯は、市街地に接する形で秋留台地を縁取っており、市民が身近に自然に触れる機会を提供しています。

多摩川及びその支流の秋川や平井川の河原には、河川によってつくられた地形と洪水などによる河川の変動を反映した特徴的な植物群落がみられます。主に、ツルヨシやオギの比較的まとまった群落が発達しており、カヤネズミなどの棲みかとなっています。さらに、永田橋上流の河原には、カワラノギクの群落がみられます。

本市に分布する特徴的な植物を環境別にみると次のようなものが挙げられます。

■山地に分布する植物

ブナ、ヒトツバカエデ、ツクバネソウ、キヌタソウ、オクモミジハグマなど

■岩角地に生育する植物

オノオレカンバ、アブラツツジ、ホツツジ、イワギボウシ、イワナンテンなど

■溪流辺に生育する植物

カツラ、オニイタヤ、ギンバイソウ、ハシリドコロ、カメバヒキオコシ、ヒメレンゲ、ナルコスゲなど

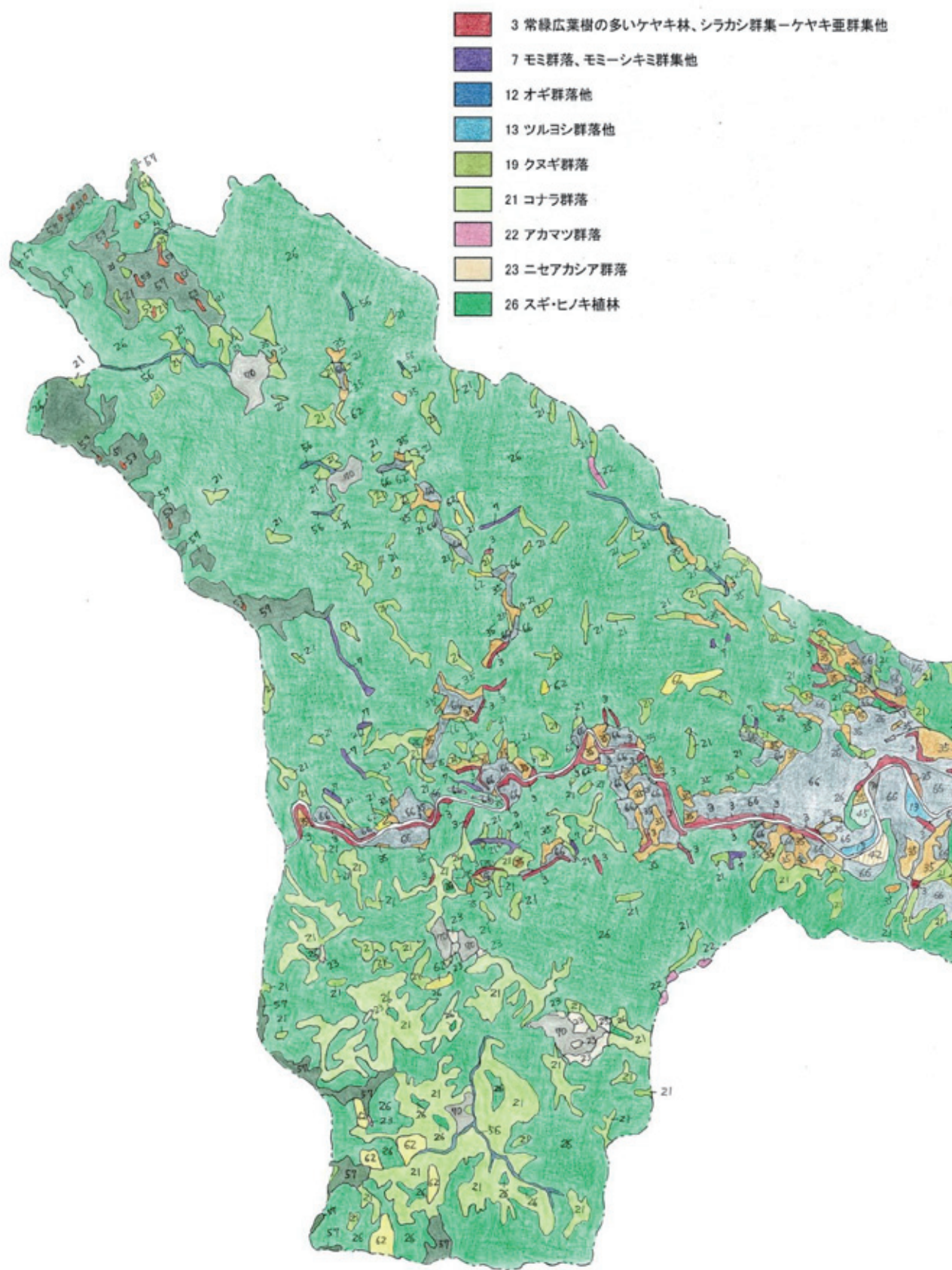
■丘陵地に分布する植物

ツガ、モミ、ケヤキ、ヤマザクラ、エノキ、ハンノキ、クサボタン、カタクリ、オケラなど

■草地に生育する植物

マルバハギ、リンドウ、オカトラノオ、オヤマボクチ、トネアザミ、リュウノウギク、シシウドなど

高明山周辺のブナ、雨武主神社のツガ、切欠地区のカタクリなどの植物は、いずれも本来はもっと標高が高い又は気温が低い場所に分布する植物で、現在の気候下ではぎりぎりの状態で生き残っている可能性が高いと考えられます。このため、地球温暖化などによる今後の環境変化を注意して見守る必要があります。



- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 27 テーダマツ植林 | 53 ツガ林、ツガーミツノバツジ群落他 |
| 28 モウソウチク林 | 56 フサザクラ・タマアジサイ群落 |
| 31 ススキーチガヤ群落 | 57 ミズナラ林、ミズナラ・クリ群落 |
| 32 シバ群落、人工シバ草地 | 62 タラノキ・クサイチゴ群落 |
| 34 カナムグラークス群落 | 66 住宅地、市街地 |
| 35 ニシキソウ・カラスビシャク群落他、畑、放置畑 | 67 樹群を持った公園・墓地など |
| 38 果樹園 | 70 造成地、人工裸地、採石地 |
| 42 ヨモギ・ユウガギク群落他 | 72 自然裸地、石河原 |
| 45 ミゾソバ群落他、水田、放置水田 | 74 水面、開放水域 |



図 13 あきる野市現存植生図（自然環境調査報告書より抜粋）

(4) 動物

これまでで示してきたとおり、本市には、様々な地形・地質を基盤に多様な植生が成立し、東京都内にありながら多くの動物が生息できる環境が存在しています。「自然環境調査報告書」によると、本市で確認された動物のうち、特定外来生物*、外来種を除く哺乳類は23種、鳥類は101種、爬虫類（ヘビ類）は8種、両生類は14種、昆虫類は129種、魚類は17種となっています。また、「東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）～東京都レッドリスト*～2010年版」に指定されている種も多く確認されており、本市は動物が生息するのに、重要かつ貴重な場所であるといえます。例えば、キツネやニホンリス、カヤネズミ、オオムラサキなどはすでに23区では絶滅してしまった動物です。

哺乳類は、ツキノワグマやカモシカといった大型哺乳類のほか、ヤマネなどの森林性の哺乳類が確認されています。そのほか、モリアブラコウモリやモモジロコウモリなど、数種の希少なコウモリの仲間が生息することも特徴的です。また、河川敷や谷戸の湿地ではカヤネズミの生息も確認されています。

一方で、近年各地で問題となっている、ニホンジカによる森林生態系被害やニホンザルによる農業被害等は、本市でも例外ではなく、それらの種は生息域や生息頭数を拡大させています。また、特定外来生物であるアライグマやクリハラリス、ガビチョウなども確認されています。アライグマは、市民との協働により、対策が進められており、捕獲等を進めています。また、クリハラリスは秋川左岸崖線の山田地区から牛沼地区で確認されておりましたが、独立行政法人森林総合研究所などとの連携により、捕獲等が一段落しています。



写真17 ツキノワグマ



写真18 カモシカ



写真19 ヤマネ



写真20 カヤネズミ

※あきる野市の動物について、より深くお知りになりたい方は「知って守ろうあきる野の自然」「自然環境調査報告書」をご覧ください。

鳥類は、クマタカやミゾゴイ、ヤマセミ、アカショウビン、ブッポウソウなど、豊かな森林や河川を持つ本市だからこそ生息できる種が確認されています。

全国的にも個体数が少なく、希少な猛禽類であるクマタカは、本市の山間地に生息していることが確認されています。クマタカは行動圏が広く、また食物網の上位種であることから、生息するためには、餌となる小動物が多数生息しているなどの豊かな環境が広がっている必要があり、自然環境調査などで把握されている本市の豊かな自然環境を裏付けるものの一つであるといえます。そのほか、ミゾゴイやブッポウソウなど、現在、東京都では西多摩地域だけで生息が確認されている種もみられます。



写真 21 クマタカ



写真 22 ミゾゴイ

爬虫類のうち、ヘビ類は 8 種が確認され、ニホンマムシ、タカチホヘビ、シロマダラといった希少な種がみつかっています。特にシロマダラは、夜行性のため、なかなか姿をみることができないことから、「幻のヘビ」と呼ばれています。

両生類は、ナガレタゴガエル、ヒダサンショウウオなどの奥山でしかみられない種が確認されています。

これらの種は本市の中でも、溪流などに生息するだけで、非常に希少な種です。また、里山の水辺や水田などが残る場所にも、トウキョウサンショウウオやトウキョウダルマガエル、シュレーゲルアオガエルなどが確認されています。

これらの両生類の生息には、一定の水辺環境が必要であり、土地利用の変化などによって、生息場所が喪失したり、分断してしまうことの影響が懸念されます。また最近では、特定外来生物であるアライグマによる両生類の卵のうや成体の被食害の影響が問題となっています。



写真 23 ナガレタゴガエル

昆虫類は、次第に減少している草原や湿地などの環境に様々な希少種が生息しています。希少種の例としては、広い礫河原に生息するカワラバッタやオサムシモドキ、谷戸の湧き水をもととする小河川や水田・湿地に生息するヤマサナエやゲンジボタル、ヘイケボタル、ヤマトセンブリが挙げられます。ヤマトセンブリは、全国でも数ヶ所ではしか生息が確認されていない希少種であり、本市では横沢入にみられます。山地から丘陵地にかけては、広い面積の樹林が必要なオオムラサキをはじめとした雑木林に生息する昆虫類が多く生息しています。洞窟に生息するヨウザワメクラチビゴミムシは、養沢鍾乳洞が基準産地です。このように、水域や樹林に生息する種では希少な種を含む多様な昆虫類が確認されています。



写真 24 ヤマトセンブリ



写真 25 オオムラサキ

魚類は、清流を代表する魚であるカジカが生息しています。絶滅が危惧されるカジカは、都内では生息場所が限られており、本市においては、多摩川と秋川の合流点より上流の全域で見られますが、近年は減少傾向にあります。そのほか、石や岩、倒木の下などを好むギバチや、水温が低く緩やかな流れを好むホトケドジョウといった希少な魚類が生息していることも特徴的です。

このように、本市では、希少な生きものが多く確認されています。また、希少種以外にも様々な生きものの生息・生育が確認されており、特に、市域の西部を中心に広がる森林や川沿いの湿性草地の存在は、多くの動物の生息の場となっています。里山の谷津田や崖線の緑地帯、湧き水などの存在も注目される環境です。例えば、谷津田の雑木林と田んぼのように、異なる地形や植生が接しているような環境の連続性が保たれた自然（エコトーン*）は、それらの環境がそろわないと生息できない種、それらを行き来して生息するような種（トウキョウサンショウウオなど）にとって、とても重要です。本市に生息する動物の中で、絶滅が危惧されている種は決して奥山だけに存在しているわけではありません（図 14）。むしろ里山や市街地周辺のエコトーンに、今では都内では数が少なくなった生きものの生息環境がかろうじて残されています。

また、本市は、関東山地から檜原村を経て森林がつながっており、市の中心を流れる秋川は多摩川を通じて下流へとつながっています。さらに、市の東部の南北にひろがる

秋川丘陵（加住丘陵）や草花丘陵といった丘陵地は青梅市・日の出町・八王子市にかけての平地につながっています。

こういった山地、丘陵地、平地といった陸域の連続性や、河川の上下流のつながりも、その中間に位置する本市において、様々な動物が生息する要因の一つといえます。なお、このような動物の生息場所のつながりを生態系ネットワーク*（エコロジカル・ネットワーク）といいます。

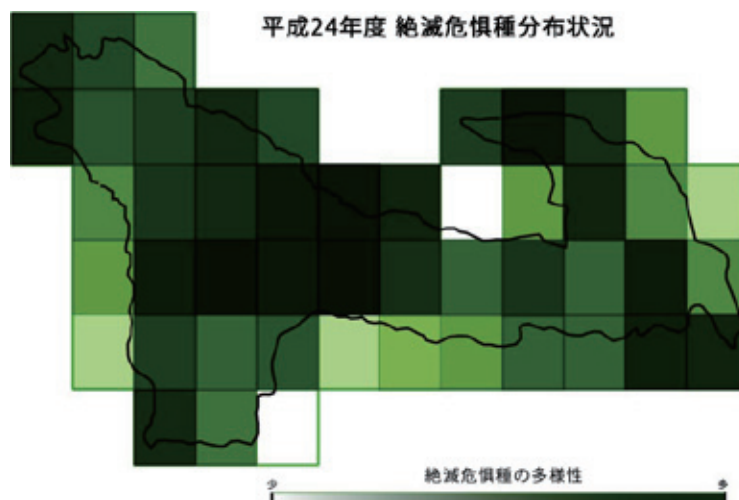


図 14 絶滅危惧種* 分布状況
（森林レンジャーあきる野活動報告書を基に作成）

(5) 人の営みと生きもの

本市の豊かな生物多様性を支えてきたのは、自然景観を構成する要素の多様さ、すなわち、「山（山地）」・「丘（丘陵）」・「川（河川）」と平野・「台地」と、それらの恵みを享受するとともに、大切に守ってきた「人の営み」です。様々な自然景観の要素から得られる生物多様性の恵みについて、人々がいかに利活用してきたのかを景観ごとに整理しました。

ア 山（山地）の林業

本市の山地では、かつては林業が盛んに営まれていました。江戸時代以降、江戸の町の発展に合わせて五日市は炭や材木の集積供給基地となりました。木炭は昭和の中ごろまで主要なエネルギー源とされ、非常に重要視されていました（写真 26）。その結果、現在でも、檜原村を含め、秋川や養沢川には炭焼き窯の跡がいくつも残っています。江戸時代、五日市の市に出荷されたものは、当初は炭が大半でしたが、次第に市に蓄えられた資金を元にスギ、ヒノキが育林されるようになりました。スギ、ヒノキの出荷の際には、これらの材木を角材として筏を組^{いかだ}み、秋川を流下させました（筏流し（写真 27））。角材は木炭よりも高い価格で売れたため、五日市に潤いをもたらし、それが新たな育林や町の発展につながりました。林業は、戦後の拡大造林をピークに、林業の採算性悪化などにより、衰退の一途をたどっていましたが、環境に対する意識が高まるなか、新たな光が当たろうとしています。

その一つは地場の材を地場で消費しようという動き（地産地消*）です。東京都森林

組合では「多摩産材」（図 15）の利用促進を進め、公共施設や工事への利用を推奨しています。

また、森林の二酸化炭素の吸収・固定機能に着目し、地球温暖化対策の一つとして森林を活かしていこうとする動きもあります。具体的には、間伐・植林等の森林整備による二酸化炭素吸収量を「J-クレジット制度*」の対象とすることや木質バイオマスエネルギーとして活用することなどです。

本市においても、地元産材の需要を喚起し、様々な視点から活用を図ることで、林業振興と地球温暖化対策の取組につなげていこうとしています。これらの新たな潮流は、「山」の森に新たな経済価値をうみ、生物多様性保全の原動力となるとともに、地域の産業の活性化につながるものとして期待されています。



写真 26 炭焼きの様子



写真 27 筏流し



図 15 多摩産材ロゴ

イ 丘（丘陵）の新炭林利用と保全 しんたん

秋川に映える秋川丘陵（加住丘陵）の新緑や紅葉の美しさは、豊かな生物多様性を物語るだけでなく、散策などを通じて市内外の人々の目を楽しませてくれます。これらの比較的新しい時代にできた丘陵地の植生は、落葉広葉樹*からなる雑木林となっています。

本市の丘陵地は、人々の生活圏の間近にあったために、「里山」として維持されてきました。その利用方法は、まさに生物多様性の恵みの継続的な利用を具体化しているものでした。かつて農家では、コナラやクヌギ、シデ類などからなる雑木林をもち、伐採した原木は薪・炭などの燃料やシイタケ栽培のホダ木*として使い、落ち葉や枝などは農業用の有機肥料として利用していました。伐採後の切り株からは萌芽*が出て、十数年もすれば雑木林は再生しました（図 16）。



図 16 萌芽更新
イラスト：飯塚 要

利用を通じて、持続的に管理されている雑木林は、よく日が入り、いろいろな植物が生育できます。カタクリやチゴユリ、フデリンドウなどの林床植物がその代表です。春植物であるカタクリは、本市周辺では最後の氷河期の生き残りといえる植物であり、落葉広葉樹が春先に新葉を展開する前の明るい光環境に依存して生育しています。現在の気候は暖かすぎるので、北向きの水気が多く、水はけの良い斜面にしか分布しません。さらに、その斜面が常緑樹林や低木層に常緑樹が繁茂する森林である場合、十分な光が得られず、生育できないと考えられています（写真 28）。

花の少ない早春に開花するこれらの草本 * 類には、チョウ類やハナバチ類などが飛来して花粉を運びます。また、夏になれば、クヌギやコナラの樹液にはカブトムシやクワガタムシ類、チョウ類などが集まり、昆虫が多ければ、それを食べる小鳥の種類も多くなります。さらに、ドングリや果実を餌にする動物も多くみることができます。

一方、ライフスタイルの変化などから、現在は伝統的な里山の利活用の仕組みが少なくなり、里山の環境に変化が見られます。このため、里山の所有者だけでなく、行政、市民、NPO、企業等の多様な主体の参加によって、環境学習やレクリエーションなど、現在のライフスタイルに合わせた人と里山の関係を再構築し、丘陵の雑木林を持続的に利用する仕組みづくりが必要となっています。



写真 28 切欠地区のカタクリ

ウ 川（河川）の漁業と河原の保全

秋川が、清らかな水をたたえ風光明媚な秋川^{ふうこうめいび}溪谷の景観を支えている大きな理由の一つとして、河川の規模が大きい割に東京都内では珍しくダムのない河川ということが挙げられます。檜原村の源頭に端を発する溪流は、溪畔の樹林とともに、多くの動物に生息の場を提供してきました。魚類相が豊かなことも特徴で、なかでもアユは秋川の象徴的な魚といえます。秋川では古くから鮎漁が盛んに行われ、江戸時代には将軍家に献上する御用鮎の産地でもありました。伝統的なさくり漁 *（メガネ釣り）は現在に伝わり、地域伝統文化の一つとして大切にされています。

秋川の河原は、かつては瀬 * や淵 * の多い野趣に富んだ河原であったとされていますが、現在は、釣りやバーベキューなどのレクリエーションの場として親しまれている広くなだらかな河原となっています。こうした河原は、人間のレジャーにとっては好都合ですが、瀬・淵などを生息場所とする魚にとっては、棲みかとして適さなくなりました。また、河原の砂礫が固まることによって植物相が変化したこともこれに拍車をかけたと考えられます。地域の皆さんにお話を伺うと、かつて、足をいれると魚がぶつかってきたよう

な魚影の濃い秋川の復活を望む声も多く聞かれます。

さらに、秋川沿いには、秋川の流水を利用した農業用水路などが多くみられ、生きものの生息・生育地として重要な役割を果たしています。例えば、切欠地区の南郷用水路ではゲンジボタルが生息しています。また、アオカワモズクやエビモなどの希少な生きものも多く確認されています。自然の川に加えて、私達人間がつくり、長く維持してきた用水路は、本市の特徴的な環境の一つといえます。

平井川は、日の出山に源を発し、草花丘陵の裾を下り多摩川にゆるやかに注ぐ里山の河川です。河川沿いには今も水田が維持され、河川敷にはツルヨシやオギの比較的大きな群落が残されています。

平井川流域では、防災と良好な自然環境の保全との両立を目指し、2000（平成12）年に平井川流域連絡会が設置され、住民と意見交換をしながら、河川整備が進められています。菅瀬橋近くのオギ・ツルヨシ群落では多数のカヤネズミの生息が確認されていたため、河川改修時にカヤネズミの退避場所を確保するとともに、オギやツルヨシの根茎を工事終了後まで保管して戻すことによって群落の早期再生を促し、カヤネズミの生息地の再生を実現した事例があります。

エ 台地の農業と緑のつながりの創出

多摩川や秋川、平井川によってつくられた秋留台地は、関東ローム層と段丘礫層が厚く堆積していて容易に水を得ることが難しかったため、畑地が広く分布していました。現在も、畑作は続いており、畑で生産されている「秋川とうもろこし」や「のらぼう菜」は本市の特産品の一つとして知られています。市街化が進むなか、市では農業振興を図る農地の確保などを進めており、現在も一定規模以上のまとまった面積の農地が維持されています。こうした地域は、東京都内でも比較的小さい状況です。

かつての集落は、段丘崖からの湧き水が利用しやすい台地の縁に沿うように分布していましたが、その後、五日市線の駅や五日市街道周辺から市街地が拡大し、現在では秋川駅を中心に市街地が形成されています（図17）。市街地の広がりに合わせて、緑地の面積は大きく減ることになりましたが、街路樹や住宅地等の植え込みなどの緑は、周辺の農地や雑木林、公園の緑、崖線の緑との連続性を保つことにつながり、動物にとって大切な移動経路や休憩場所、隠れ場になっています。市街化が進んだ地域では、このような生態系ネットワークを維持し、拡大していくことで、生物多様性の向上を図ることができます。今後は植栽する樹木を郷土に自生するものにしたり、高さの違う樹木を植えて草地を創出し、生きものが訪れやすい仕組みをつくったりするなど、生物多様性に配慮したまちづくりを進めていく必要があります。

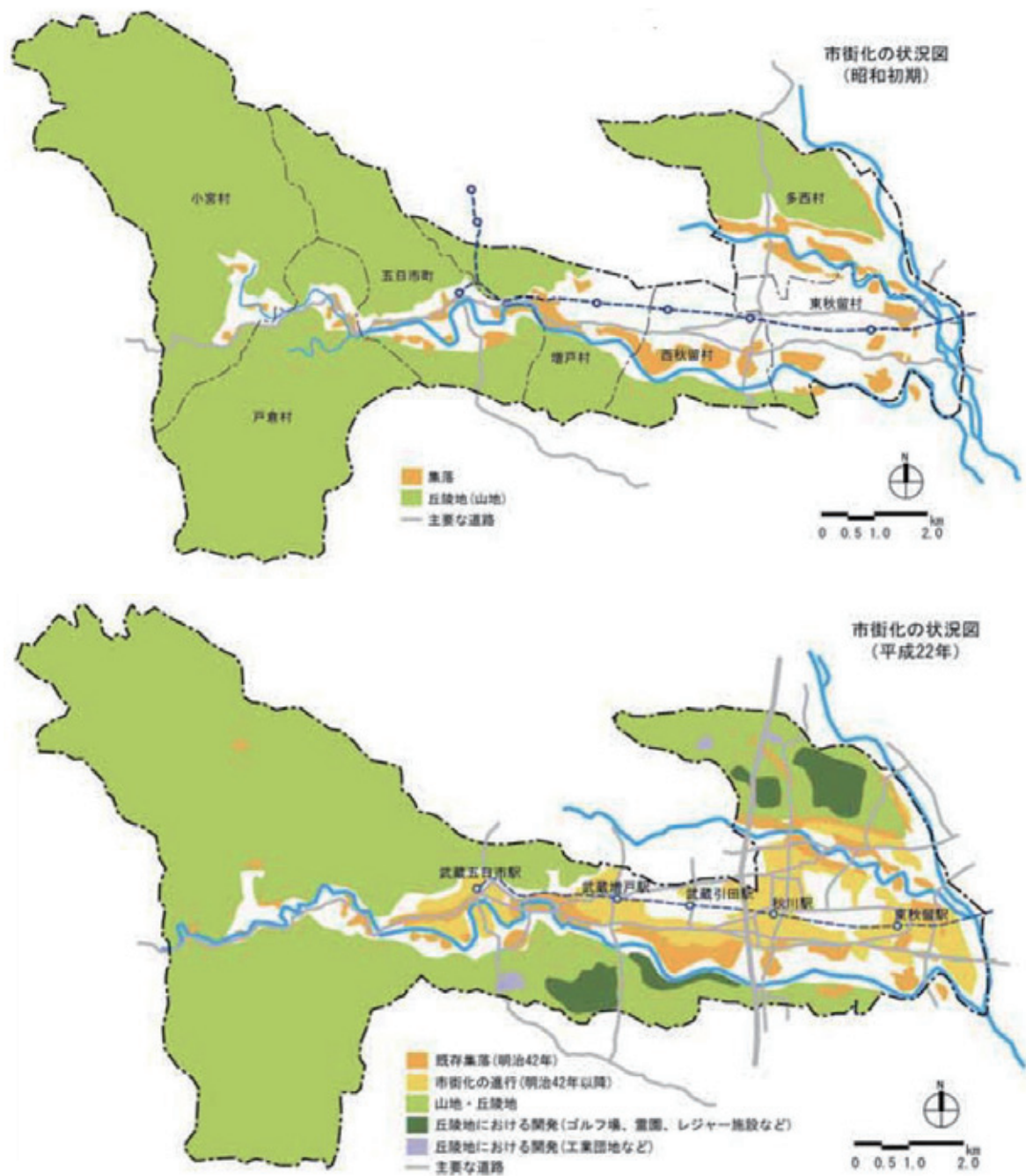


図 17 市街地拡大の変遷 (あきる野市都市計画マスタープラン)

コラム12 「のらぼう菜」と「秋川とうもろこし」

地域で特産品として親しまれている野菜などの食材は、その地域の気候や風土に適し、地域で永く食べられているなど、まさに生物多様性の恵みを実感できるものといえます。

のらぼう菜（のらぼう）や秋川とうもろこしもその一つです。

のらぼう菜は、アブラナ科の食用なばな（菜花）で、太い茎や葉はやわらかくてほんのり甘く、苦味やくせのない味わいが特徴です。耐寒性もあり、生命力が強い品種ですが、収穫後はしおれやすく長距離の輸送には適していません。そのため、輸送手段が発達していない時代には、広く出回ることがなく、地域の伝統野菜となっていました。のらぼう菜の普及により、江戸時代末期の天明の大飢饉（1782年 - 1788年）や天保の大飢饉（1833年 - 1839年）の際に、地域の人々が飢餓から救われたと伝えられています。

小中野地区の子生神社^{こやす}には、このことを記念して「野良坊菜之碑」が1977（昭和52）年に建立されています。現在では、「五日市のらぼう部会」が他品種との交雑を防ぐために市内の山間部で栽培し採種するなど、伝統野菜の系統の保全に努めています。

秋留台地では五日市街道沿いを中心とうもろこし畑が広がっています。秋川とうもろこしは甘みが強く、ひとつひとつの粒が大きいのが特徴です。6～7月に収穫期をむかえ、秋川ファーマーズセンターなどには様々な種類のとうもろこしが並びます。7月中の週末に開催される「とうもろこしまつり」は、近隣のみならず多くの観光客の方々にも親しまれる生物多様性の恵みを体感できるイベントとなっています。



のらぼう菜



秋川とうもろこし

3 地域区分と地域ごとの現状と問題点

本市は、山、森、里山、川などの多様な自然環境が存在しており、場所によって特徴が異なります。このため、本市の生物多様性の現状と問題点、さらに問題点から得られる課題に対応する取組を進めるに当たり、次の（１）～（３）までの自然環境の特徴などに基づき、（４）のとおり、生物多様性の取組を進めていくための地域区分を設定することとします。

（１）地形・地質による区分

本市を地形・地質の観点から区分すると、次の六つに分類することができます。

北西部の秩父帯の地域、南西部の四万十帯の地域、中央部の五日市町層群の卓越する五日市盆地、北東部の草花丘陵、南東部の秋川丘陵（加住丘陵）、東側中央部の秋留台地です（図 18）。

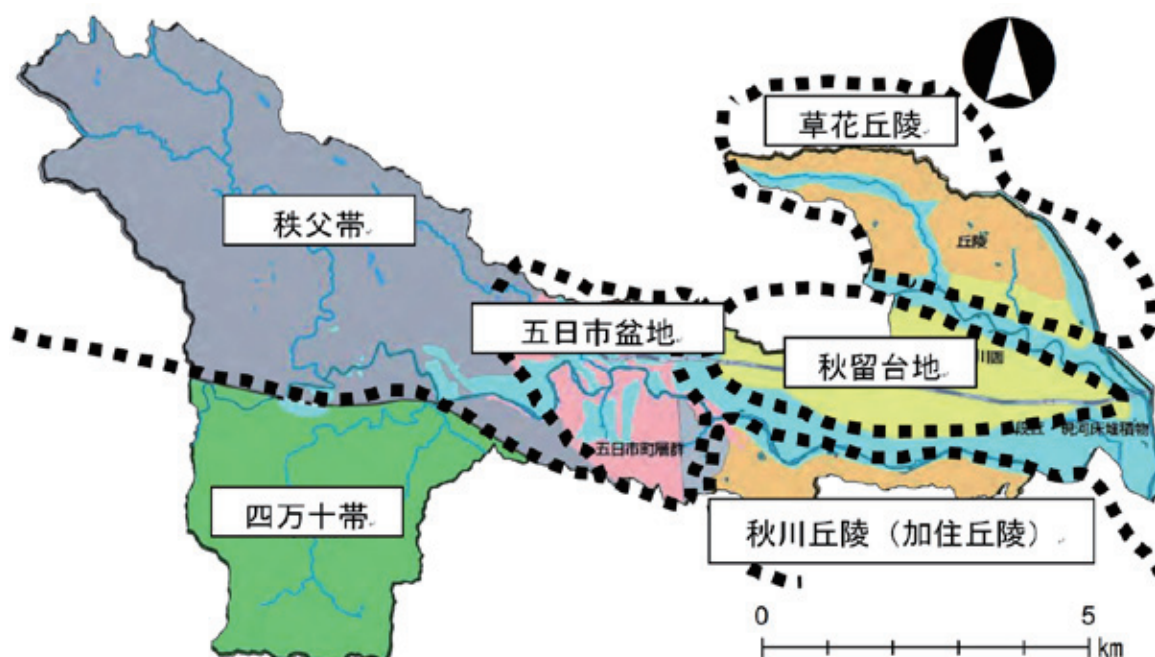


図 18 地形・地質による区分

(2) 河川の流れによる区分

河川の流れ（秋川、平井川）に着目して区分をすると次のようになります（図 19）。

本市を西から東に流れる流程の長い秋川については、市内の流域を河川の形状に合わせて、三つに区分します。山地の狭い谷を溪流として流れ下る区域を上流部とし、秋川本流に盆堀川が合流する沢戸橋辺りまでとします。ここから、川幅が一気に広がる山田大橋付近までの区域を中流部とします。山が開けた五日市盆地では、秋川は蛇行しながら広い河原を伴って流れていきます。そして、多摩川へ合流するまでの区域を下流部とします。六枚屏風岩にみられるように、右岸の秋川丘陵（加住丘陵）を鋭く侵食しながら東に流れて多摩川へ合流します。

支流である鯉川も含む平井川流域は、渓谷を形成する秋川とは異なり、上流から下流までの比高が少なくゆるやかに流れ下り、河川の形状も一定であるため、一つの区分とします。この流域では、ヨシやツルヨシなどの湿性草本が多いことも特徴です。

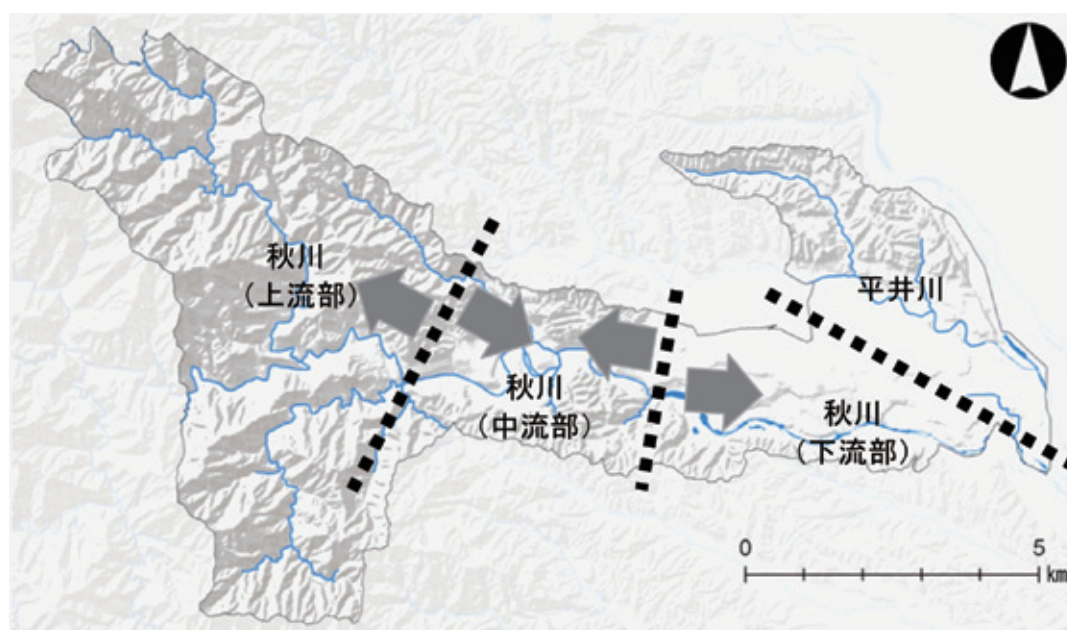


図 19 河川の流れによる区分

※河川の流れによる区分は、市域に含まれる部分の河川を対象としており、全川の河川区間ではありません。

(3) 森の類型による区分

市では、市域の6割を占める森林を市民の財産と位置付け、人と森との共生の姿を創出する「郷土の恵みの森構想」に基づいて、地域との協働による森づくりを進めています。この構想では、市域の森について、森林の特性や自然、利用状況、地域の意向などから、清流の森などの「森の類型区分」を設定しています。この類型区分に着目して、市西部の山地の森について区分をすると、次のとおりとなります（図20）。



図20 市西部の山地の森の類型区分図（郷土の恵みの森構想を基に作成）

(4) 生物多様性に関する地域区分の設定

地域の特徴を反映するために適すると考えられる (1) から (3) までの区分をまとめると次のようになります (表 2)。

表 2 自然環境の特徴を表す地域区分の考え方

区 分	説 明
(1) 地形・地質による区分	ア 秩父帯 イ 四万十帯 ウ 五日市盆地 エ 秋川丘陵 (加住丘陵) オ 秋留台地 カ 草花丘陵
(2) 河川の流れによる区分	ア 秋川上流部 イ 秋川中流部 ウ 秋川下流部 エ 平井川
(3) 森の類型による区分	ア 清流の森を中心とした地域 イ 経済の森を中心とした地域 ウ 健康の森・観光の森などの活用を中心とした地域



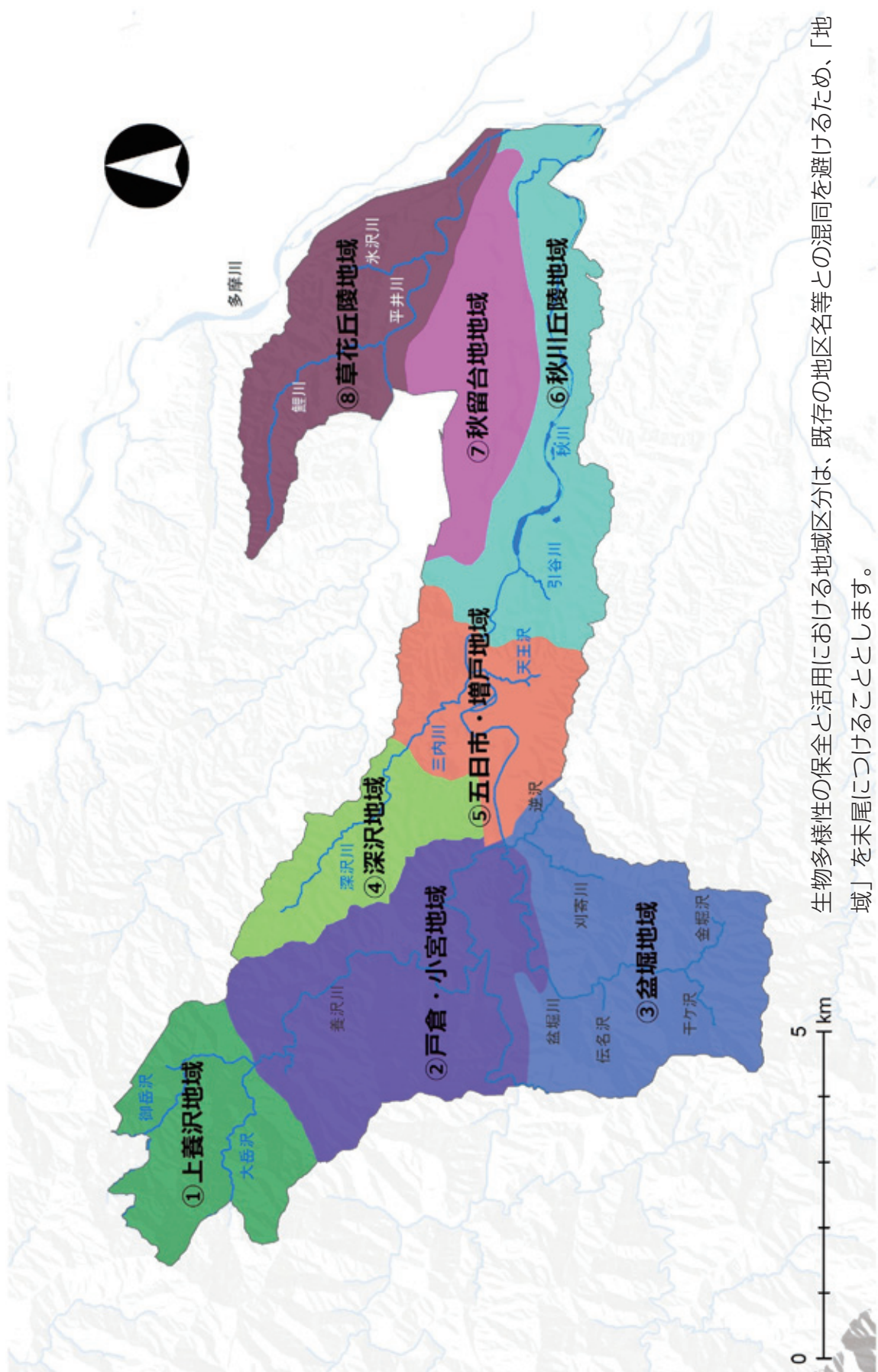
(2) 河川 区間 による 区分	ア 秋川上流部	(3) 森の類型による区分 ア 清流の森を中心とした地域 → 上養沢地域 イ 経済の森を中心とした地域 → 盆堀地域、深沢地域 ウ 健康の森・観光の森などの活用を中心とした地域 → 戸倉・小宮地域
	イ 秋川中流部 ウ 秋川下流部 エ 平井川	(1) 地形・地質による区分 ウ 五日市盆地 → 五日市・増戸地域 エ 秋川丘陵 (加住丘陵) → 秋川丘陵地域 オ 秋留台地 → 秋留台地地域 カ 草花丘陵 → 草花丘陵地域

(2) 河川の流れによる区分から、山地の狭い溪谷を流れる秋川上流部とそれ以外の区域に区分します。

秋川上流部は、大半が森であることから、(3) 森の類型による区分により、清流の森を中心とした地域（上養沢地域）、経済の森を中心とした地域（盆堀地域、深沢地域）、健康の森・観光の森などの活用を中心とした地域（戸倉・小宮地域）の四つに区分します。

秋川中流部、秋川下流部、平井川については、生物多様性が地形・地質から形づくられているという観点から、(1) 地形・地質による区分を用いて、市中央部の五日市盆地の地域（五日市・増戸地域）、市南東部の秋川丘陵（加住丘陵）の地域（秋川丘陵地域）、市東側中央部の秋留台地の地域（秋留台地地域）、市北東部の草花丘陵の地域（草花丘陵地域）の四つに区分します。

これらの八つの地域を生物多様性に関する取組を進めていくための地域区分と設定します（図 21）。



生物多様性の保全と活用における地域区分は、既存の地区名等との混同を避けるため、「地域」を末尾につけることとします。

図 21 生物多様性に関する取組を進めていくための地域区分

(5) 地域ごとの現状と問題点など

(4) で設定した八つの地域区分ごとに、現状を整理しました。

現状は、各地域の生物多様性の特徴を表すため、生きものの生息・生育環境として重要な場所と特徴的な生きものについてまとめています。

また、各地域で生物多様性の取組を進めるため、地域ごとの主な問題点の抽出も行いました。なお、問題点については、各地域の状況から推定されるものも挙げています。

ア 上養沢地域



【概況】

養沢神社より上流の地域で、硬い緻密な堆積岩による比較的岩がちで険しい斜面が多い地域です。「郷土の恵みの森構想」では沢沿いが「清流の森」に位置付けられており、苔に覆われた岩と清流の大岳沢などの豊かな森

や水に恵まれ、大型の哺乳類をはじめとする様々な生きものが生息・生育する地域です。

一部に石灰岩層を含み、東京都指定天然記念物の大岳鍾乳洞をはじめ、養沢鍾乳洞といった鍾乳洞が発達しています。また、高さ 35m、幅約 50m にわたってチャートが占めるつづら岩が存在するなど、中古生代の地形・地質が特徴的な地域です。

この地域は全域が秩父多摩甲斐国立公園*の区域に含まれており、上高岩山をはじめとした山地からの眺望も良く、様々な自然資源が存在しています。

植生は、大半がスギ・ヒノキ植林ですが、川沿いには一部ケヤキの大径木やカエデ林などの溪畔林*がみられます。また、高岩山周辺と、馬頭刈山から富士見台へ至る馬頭刈尾根には二次林が一部残存しています。二次林はおよそ標高 800m を境に下部はコナラ林、上部はミズナラ林となります。かつて薪炭*利用された広葉樹林が利用されないまま老齢林*となり、コナラ・モミなどの枯損もみられます。

動物はツキノワグマやヤマネなどの森林性の哺乳類が生息しています。また、東京都内では、本市のほか、八王子市、青梅市、奥多摩町、檜原村などの奥山でしかみられないヒダサンショウウオが生息することも特筆すべきことです。また、養沢鍾乳洞はヨウザワメクラチビゴミムシが最初に確認された基準産地です。

夏鳥のオオルリは、多摩地域の山地の渓谷沿いで繁殖が確認されており、このような種の生息環境としても上養沢地域の森林は貴重であるといえます。



上養沢地域の生物多様性の特徴（まとめ）と主な問題点	
特 徴	○全域が秩父多摩甲斐国立公園の区域に含まれ、そのほぼ全てが特別地域に指定されている。 ○地域のほぼ全てを森林が占め、その大半がスギ・ヒノキ植林からなる。 ○コナラ、ミズナラを中心とした二次林が一部残されている。 ○動植物が豊富に生息・生育している。 ○鍾乳洞、巨木、湧き水等の自然資源が豊富に存在する。
問題点	○二次林の荒廃 ○森林生態系被害の発生 ○経済林被害の発生 ○人間活動による希少な生きものの生息・生育環境への影響

イ 戸倉・小宮地域



【概況】

養沢川、秋川上流沿いに広がる地域で、硬い緻密な堆積岩から構成されています。豊かな自然に恵まれ、上養沢地域と同様に、大型哺乳類をはじめとする様々な生きものが生息・生育しています。

大半の地域が秩父多摩甲斐国立公園の区域に含まれているとともに、滝や眺望の良い場所といった自然資源のほか、鍾乳洞（三ツ合鍾乳洞）が発達しています。また、地域のシンボリック的存在である馬頭刈山から高明山までの登山道には、チャートや石灰岩がみられるとともに、温浴施設である「秋川渓谷瀬音の湯」や釣り場などのレジャー施設も多く存在しています。

このため、「郷土の恵みの森構想」では、「経済の森」のほか、「観光の森」や「健康の森」に位置付けられています。また、自然とのふれあい活動が活発な地域であることを活かし、小宮ふるさと自然体験学校では、次世代の子ども達の育成に向けた環境教育が進められています。

植生の大部分はスギ・ヒノキ植林ですが、養沢川、秋川の渓流沿いには一部自然度の高い溪畔林が残存し、地域の活動によって再生されています（ケヤキ林、カエデ林等）。二次林は暖温帯のコナラ、クリを中心とした林で支尾根*などにみられます。

城山や眺望の良い加茂原などは、地域のシンボリックな存在として地域の人々に親しまれています。

秋川沿い、養沢川沿いには古い家並みが残されている場所もあり、山村景観が維持されています。これらの人家の裏山もかつては畑地や薪山^{たきぎやま}として利用されていました。現在では、スギ・ヒノキの植林となっており、これらの森林は壮齢林*・老齢林となっているため、森林性の動物の隠れ場となっていて、野生動物と人間の距離が近くなっています。特に小宮地区では、1940年代に萱場^{かやば}*などの共有地にスギの植林が進められ、老齢林となっています。

馬頭刈尾根周辺ではカモシカやキツネが確認され、深い谷に成熟した巨樹が残存する秋川渓谷流域ではムササビが確認されています。ムササビは、樹洞や大径木のある社寺林などの古くからある森を好みます。秋川渓谷の渓流では、カジカガエルが生息しています。また、絶滅が危惧されているヤマドリが安定して生息できるような空間が残されています。



戸倉・小宮地域の生物多様性の特徴（まとめ）と主な問題点	
特 徴	○大半の地域が秩父多摩甲斐国立公園の区域に含まれる。 ○地域のほぼ全てを森が占め、そのほとんどはスギ・ヒノキ植林からなる。 ○溪畔林が残されている。 ○コナラ、クリを中心とした二次林が残されている。 ○大型哺乳類をはじめ、動植物が豊富に生息・生育している。 ○鍾乳洞、巨木、湧き水等の自然資源が豊富に存在する。 ○小宮ふるさと自然体験学校で環境教育が進められている。
問題点	○人工林の荒廃 ○山村景観の荒廃 ○経済林被害の発生 ○農業被害の発生 ○湧き水の数と水量の減少

ウ 盆堀地域

【概況】



盆堀川流域の経済林を中心とした地域であり、戸倉財産区として、スギ・ヒノキ植林のモデル的な森林施業*が行われています。「郷土の恵みの森構想」では大半が「経済の森」に位置付けられているとともに、伝名沢など

の沢に沿った地域は「清流の森」に位置付けられ、様々な生きものがみられます。また、刈寄山、市道山、臼杵山の戸倉三山が散策コースやトレイルランニングコース*であることなどから、「健康の森」にも位置付けられています。

四万十帯小仏層群の硬質な砂岩、泥岩等からなり、盆堀川が深く多数の渓谷を刻み大小の滝など渓谷美を形成しています。盆堀川の上流にある伝名沢はハイキングや沢登りに利用されています。

また、新宿区との連携による「新宿の森・あきる野*」や港区との連携による「みなと区民の森*」が整備されており、森林整備による二酸化炭素の吸収量増加や、自然体験学習、交流促進の場として、活用されています。

植生は、スギ・ヒノキ植林が大半を占めていますが、当地域では比較的大きな面積のコナラ、クリなどの二次林が残存しています。経済林のため、急しゅんな斜面や基岩*が露出しているような地形への植林は回避されており、落葉広葉樹林がモザイク状に点在しています。この地域では、コナラが中心の構成ですが、ほかの落葉広葉樹林に比べて、林内にはヒサカキ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹の割合が多くなっています。戦後の復興期に木材を搬出した経緯もあり、老齢林と呼べる森林はあまりみられません。溪流沿いにはダンコウバイ、ウワミズザクラ、オオバアサガラなどがみられます。

動物では、森の食物連鎖の頂点に立つクマタカが生息しています。クマタカの生息には、餌となる小動物の生息が必要であり、この地域の生物相が豊かであることの裏付けの一つとなります。溪流にはカワネズミやナガレタゴガエルのほか、湧き水から崖線沿いを流れる小川等に生息するカジカなど、豊かな水環境を好む種が多くみられることも特徴です。

Ⅰ 深沢地域

【概況】

深沢川に沿って広がる地域で、中生代秩父層群からなり、金比羅山へ緩やかに連なる金比羅尾根と深沢川によって刻まれた溪谷が特徴的です。深沢川にはゲンジボタルやヘイケボタルも飛翔します。

江戸城築城に木材を切り出した歴史が物語るように、古くから林業が盛んな地域であり、「郷土の恵みの森構想」では大半が「経済の森」に位置付けられています。また、懐かしさを覚える茅葺き^{かやぶ}屋根の家や地域の象徴である山抱きの大カシ（ウラジロガシ）、南沢あじさい山、深沢家屋敷跡などの地域資源を活かした観光振興による地域づくりの取組が進められていることから、「観光の森」にも位置付けられています。

植生は、現在もほとんどがスギ・ヒノキ植林であり、盆堀地域と同様に戦後の復興期に木材の供給を行いました。その後も引き続き、植林されたため、若い樹木が多く、老齢林はあまりみられません。古い林業地帯の証として、山林の境界木には大径木のスギ（樹齢200年前後）が残されている場所もあります。これまでの3地区と比較して、落葉広葉樹林は少なく、植林された針葉樹林が大半です。支尾根等にはウラジロガシ、モミなどの大木が残存し、川沿いには一部溪畔林が成立しています。

動物では、ノスリやモモンガ、サンコウチョウなどの森林性の種が生息しています。モモンガは樹洞がある樹木や大径木を好むことから、この地域にも樹齢の高い樹木が多いことが分かります。そのほか、良好な水環境が残されていることから、市域の他の水環境が豊かな地域と同様に、東京都内でも希少となっているヘイケボタルやゲンジボタルもみられます。





深沢地域の生物多様性の特徴（まとめ）と主な問題点	
特 徴	○金比羅山へ連なる金比羅尾根と深沢川によって刻まれた渓谷がある。 ○地域のほぼ全てがスギ・ヒノキ植林からなる林業生産地である。 ○森林性の動物や水環境を好む動物が生息している。 ○あじさい山や深沢家屋敷跡などの観光資源が存在する。 ○観光振興を目指した花木類の植栽が行われている。
問題点	○人工林の荒廃 ○二次林の荒廃 ○経済林被害の発生 ○森林の保水力の低下

オ 五日市・増戸地域



【概況】

秋川中流部に位置する五日市盆地を含んだ地域で、新第三紀の五日市町層群からなり、比較的軟弱な地質が丘陵を形づくっています。中世から近世にかけて採掘が盛んだった伊奈石もこの層群に相当します。

五日市街道、檜原街道に沿って古くから集落が形成されました。南西部の里山にある広徳寺は、東京都指定天然記念物のカヤやタラヨウがあるほか、大径木のイチョウ、茅葺き屋根の山門など、地域で大切にされてきた古刹*の一つです。中央を通る秋川沿いに広がる河原には、釣りやバーベキューに訪れる観光客が多くみられるなど、本市を代表する観光の拠点として知られています。また、南部には小峰工業団地も立地しています。

北部の丘陵には一部で谷津田が発達し、横沢入は、東京都により、里山保全地域に指定されています。横沢入に代表される里山地域では、現状ではスギ、ヒノキの若齢林*や壮齢林が広い面積を占めています。また、里山保全の取組によって管理された谷津田では湿地性の植生がみられます。

秋川は基盤を侵食し、大きく蛇行しながら東流しています。また、一部には堆積物が残り、河川敷が広がっています。秋川右岸には丘陵のコナラ、クリなど多様な構成種からなる雑木林をみることができます。

動物では、里山の環境を示す種が多くみられ、草地や農耕地等で捕食するキツネやアオバズクのほか、タヌキ、アナグマといった哺乳類も生息しています。アオバズクは丘陵地や社寺林等にある大径木でも生息します。また、水田等の水辺とそれに連続する森林にはトウキョウサンショウウオが生息しています。そのほか、夏鳥として希少種であるミゾゴイが飛来します。

横沢入では、希少種であるヤマトセンブリの生息が確認されています。ヤマトセンブリは、平地から丘陵地の湧き水のある湿地や池沼を好む昆虫です。しかし開発などにより棲む場所が減少し、全国的には1957（昭和32）年に確認されて以来記録が途絶え、絶滅が危惧されていましたが、37年ぶりに横沢入で再発見されました。



五日市・増戸地域の生物多様性の特徴（まとめ）と主な問題点	
特 徴	○谷津田が発達した丘陵が横沢入里山保全地域に指定されている。 ○秋川は河川敷が広がり、大きく蛇行しながら流れている。 ○秋川流域の里山の典型的な植生（雑木林）が残存する。 ○市街地周辺にトウキョウサンショウウオ、ミゾゴイなどの希少な動物が生息している。 ○秋川沿いの観光業が盛んである ○小峰工業団地が立地するとともに、市街地が広がっている。
問題点	○二次林の荒廃 ○谷津田生態系の衰退 ○希少な生きものの生息環境の変化 ○水田及び跡地など水辺環境の荒廃 ○樹林・草地の減少 ○農業被害の発生 ○外来種の侵入・繁茂（生態系被害の発生）

カ 秋川丘陵地域

【概況】

秋川丘陵（加住丘陵）と河岸段丘からなる地域で、地域の大部分が東京都立秋川丘陵自然公園＊に指定されています。

新第三紀の砂層、粘土層、礫層を伴う軟岩層で構成されているとともに、秋川による開

析＊が進み、六枚屏風岩等の急崖や痩せ尾根などが特徴的です。また秋川の南部にある弁天山の山頂近くには、チャートの洞穴がみられます。

多くの集落が広がるとともに、秋川沿いには農地もみられます。また、秋川には河原が広く開け、多くの観光客に釣りやバーベキューで利用され、市内最大の観光施設である東京サマーランドに訪れる観光客も多くみられます。

秋川は緩やかに東流し、砂礫地やヨシ、ツルヨシ、オギの群落が広がる地域です。これらの河川敷の草地ではカヤネズミ、河原の砂礫地ではカワラバッタをみることができます。また、秋川左岸には崖線が形成され、ケヤキ、カシ類、スギ、ヒノキなどの樹林に竹林が縞模様のように入り込んだ樹林帯を形成しています。かつては薪山として利用されていた林で、地形や斜面の向きに応じてコナラ・ヤマザクラの株立ちが残っています。近年は、薪として利用されないため、地上部の枝が大きく広がり、重量を増していることから、六枚屏風岩などがある崖地では崩落の要因の一つとなっています。植生はコナラ、アオハダ、ヤマザクラが主な高木で、痩せ尾根の乾燥している地区では、ヒサカキなどの陰樹＊が林床を塞ぎ、草本の衰退がみられます。痩せ尾根のモミ林や北向き斜面沖積錐下部に成立するカタクリは地域を代表する種で、本市の保存緑地に指定されている切欠地区のカタクリ群生地は都内有数の群生地として知られています。また、雨武主神社のある朝日山の北側斜面に広がるモミ・ツガ林は、侵食を受けた痩せ尾根に分布し、本市の特徴的な植生の一つです。

動物では、比較的標高が高い針葉樹林内を主な繁殖場所とするウソや、秋川の下流域の川岸で生息記録の多いイタチ、水田や水路、湿地等の水辺に多くみられるトウキョウダルマガエルが生息しており、秋川丘陵地域がバリエーションに富んだ環境を持つことを示しています。また冬にはコガモなどの冬鳥が飛来します。





	秋川丘陵地域の生物多様性の特徴（まとめ）と主な問題点
特 徴	○六枚屏風岩などの急崖や痩せ尾根が多い。 ○崖線下部には多くの湧き水がみられる。 ○地域の約4分の1が森林であり、雑木林を構成する植生がみられる。 ○氷河期の生き残りともいうべき植物（カタクリ）がみられる。 ○魚類や水田を好む両生類、これを餌とする鳥類などが生息している。 ○東京サマーランド、秋川を利用した釣りやバーベキューなどの観光産業が盛んである。
問題点	○二次林の荒廃 ○谷津田生態系の衰退 ○水田及び跡地など水辺環境の荒廃 ○樹林・草地の連続性の分断 ○樹林・草地の減少 ○農業被害の発生 ○外来種の侵入・繁殖（生態系被害の発生） ○河川環境の劣化（単純化）

キ 秋留台地地域

【概況】

秋川と平井川に囲まれた地域であり、多摩川の支流である秋川と平井川によって削られて形成された第四紀以降の河岸段丘の一つで立川面と呼ばれる広大な平坦面です。段丘上には関東ローム層が厚く堆積し、比較的乾燥



した立地環境となっています。

秋川と平井川によって形成された平坦地の秋留台地は古くから人間活動により改変されており、まとまった残存樹林は二宮神社、出雲神社などの社寺林にみられます。また、東部に位置する東京都立秋留台公園の植栽樹群も特徴的です。東京都立秋川高等学校跡地のメタセコイア並木は地域のシンボリックな存在となっています。

かつて集落は、水の得やすい台地の縁に存在し、台地には農地が広がっていました。近年は市街地が拡大し、市街地の緑地やその周辺の農地などに関わりのある生きものが生息・生育しています。

区分的には秋川丘陵地域に入りますが、台地の縁に当たる段丘崖にはベルト状にケヤキ、アラカシ、シラカシ等の雑木林が残存し、多くの生きものの生息・生育の空間となっています。

動物としては、丘陵地や河川敷等の草地や耕作地の環境を代表するチョウゲンボウやヒバリ、キジが生息しているほか、キツネなどもみられます。また、様々な環境に生息できるアオダイショウは、秋留台地地域の市街地でもみることができ、ヘビ類の中では身近な生きものです。このように、秋留台地地域は、人の暮らしと共生する野生動物がみられる地域ですが、一方でチョウゲンボウやヒバリが好むような草地環境は、全国的な傾向と同様に減少傾向にあります。



秋留台地地域の生物多様性の特徴（まとめ）と主な問題点	
特 徴	○秋川と平井川によって形成された広大な平坦地（秋留台地）がある。 ○樹林は非常に少ないが、一部社寺林や段丘崖の雑木林として残存している。 ○人の暮らしと共生できる野生動物が生息している ○市街地周辺に農地（畑、果樹園）が広がっている。 ○地域東部には東京都立秋留台公園がある。 ○市街地が広がり、商工業も盛んである。
問題点	○休耕地の増加 ○樹林・草地の減少 ○農業被害の発生 ○外来種の侵入・繁茂（生態系被害の発生）

ク 草花丘陵地域



【概況】

平井川の北側に位置する比較的起伏の大きい丘陵地（草花丘陵）と平井川の河岸段丘からなる地域で、新第三紀の丘陵性堆積物からなり、砂層、礫層、粘土層を含む軟岩層で構成されています。平井川によって開析され、その氾濫原*にはかつては湿地や水田が多く存在していました。

また、多摩川に接する地域の一部は東京都立羽村草花丘陵自然公園*に含まれます。

この地域は、丘陵の自然と里山の自然がみられ、様々な生きものが生息・生育しており、特にトウキョウサンショウウオの基準産地としても知られています。

丘陵地の植生は、コナラ、ヤマザクラなどの高木林にモミ、アカマツが点在する典型的な武蔵野の丘陵の景観がみられます。かつては薪山として利用されてきたと考えられますが、薪炭の利用が無くなり、人の手が入らなくなったことで、ヒサカキが急激に広がっており、南関東の自然植生といわれる照葉樹の暗い森への遷移がはじまっています。その中でも豊かな里山が残る菅生地区では、産学公の協働による里山・里地の活性化事業によって、里山の景観や生態系の保全再生活動・活用が行われています。

平井川の河川敷では池状の入江（ワンド）のヨシ群落やツルヨシ、オギ群落などが、地形や水条件に応じてモザイク状に分布し、カヤネズミ等の貴重な生息地を提供しています。そのほか、モミやマツ等の針葉樹の林では、オオタカの繁殖が確認されています。また、絶滅が危惧されているツチガエルは、平井川流域や菅生地区を中心に確認されており、これらの場所は貴重な生息場所であるといえます。さらに、この地域で生息が確認されているホトケドジョウは、都内においては、西多摩や南多摩の地域で少数が生息するのみとされています。



草花丘陵地域の生物多様性の特徴（まとめ）と主な問題点	
特 徴	○平井川・多摩川の河川敷には地形や水条件に応じて様々な植生が成立している。 ○農地、市街地、小規模に残された雑木林のモザイク的な環境が残されている。 ○特徴ある河川敷の植生に応じた動物が生息している。 ○トウキョウサンショウウオの基準産地である。 ○丘陵斜面の樹林帯や寺社林の植生が維持されている。 ○平井川の氾濫原には耕作地が残存している。 ○「郷土の恵みの森づくり事業」の一環として、産学公の協働による森づくりと地域づくりが進められている。
問題点	○樹林・草地の連続性の分断 ○樹林・草地の減少 ○二次林の荒廃 ○谷津田生態系の衰退 ○水田及び跡地など水辺環境の荒廃 ○農業被害の発生 ○外来種の侵入・繁茂（生態系被害の発生） ○河川環境の劣化（単純化）

4 生物多様性の課題

3で示したとおり、本市の生物多様性の現状は地域ごとに特徴があり、問題点も多岐にわたっています。生物多様性の保全と活用を進めていくに当たっては、各地域の特徴や問題点を考慮していく必要があります。

このため、地域ごとに抽出した主な問題点と解決に向けた課題をまとめました（表3）。

上養沢地域、戸倉・小宮地域、盆堀地域、深沢地域のように森林が多い地域では、ライフスタイルの変化などに伴い、人の利用が減少し、一部の生きものの生息・生育環境の劣化や生態系サービスの低下などの問題が出ています。

一方、五日市・増戸地域、秋川丘陵地域、秋留台地地域、草花丘陵地域のように市街地や耕作地が多い地域では、開発などの人間活動により、樹林、草地をはじめとした自然環境の面積の減少のほか、農業の担い手不足に伴い、耕作地周辺の環境について休耕地の増加やこれに伴う質の低下がみられます。

表3 地域別の生物多様性の主な問題点と課題

地域区分	主な問題点	課 題
① 上養沢地域	二次林の荒廃	森林経営の健全化や適正管理の実施 担い手育成
	森林生態系被害の発生	野生動物の個体数管理* 防除対策の実施
	経済林被害の発生	
	人間活動による希少な生きものの生息・生育環境への影響	生きものの生息・生育状況の把握 森林管理のルールづくり
② 戸倉・小宮地域	人工林の荒廃	適正管理の実施 担い手育成
	山村景観の荒廃	耕作地放棄の抑制 担い手育成
	経済林被害の発生	野生動物の個体数管理 防除対策の実施 有害鳥獣対策・外来種対策の実施
	農業被害の発生	
	湧き水の数と水量の減少	広葉樹への樹種転換

表 3 地域別の生物多様性の主な問題点と課題（続き）

地域区分	主な問題点	課 題
③ 盆堀地域	人工林の維持	林業振興
	二次林の荒廃	森林経営の健全化や適正管理の実施 担い手の育成
	山村景観の荒廃	保全等の仕組み構築 担い手育成
	経済林被害の発生（一部）	野生動物の個体数管理 防除対策の実施
	森林の保水力の低下	森林の適正管理の実施
④ 深沢地域	人工林の荒廃	林業振興
	二次林の荒廃	必要に応じた適正管理の実施 担い手育成
	経済林被害の発生	野生動物の個体数管理 防除対策の実施
	森林の保水力の低下	森林の適正管理の実施
⑤ 五日市・増戸地域	二次林の荒廃	必要に応じた適正管理の実施 担い手育成
	谷津田生態系の衰退	
	希少な生きものの生息環境の変化	生き物の生息・生育状況の把握 森林・河川管理のルールづくり
	水田及び跡地など水辺環境の荒廃	保全等の仕組み構築 農業振興 後継者育成
	樹林・草地の減少	土地利用改変（宅地化等）時の配慮
	農業被害の発生	野生動物の個体数管理 防除対策の実施 有害鳥獣対策・外来種対策の実施
	外来種の侵入・繁茂（生態系被害の発生）	外来種対策の実施

表 3 地域別の生物多様性の主な問題点と課題（続き）

地域区分	主な問題点	課 題
⑥ 秋川丘陵地域	二次林の荒廃	必要に応じた適正管理の実施 担い手育成
	谷津田生態系の衰退	
	水田及び跡地など水辺環境の荒廃	保全等の仕組み構築 農業振興 担い手育成
	樹林・草地の連続性の分断	土地利用改変（宅地化等）時の配慮
	樹林・草地の減少	
	農業被害の発生	野生動物の個体数管理 防除対策の実施 有害鳥獣対策・外来種対策の実施
	外来種の侵入・繁茂（生態系被害の発生）	外来種対策の実施
	河川環境の劣化（単純化）	河川管理のルールづくり 生物多様性への配慮
⑦ 秋留台地地域	休耕地の増加	保全等の仕組み構築 農業振興 後継者育成
	樹林・草地の減少	土地利用改変（宅地化等）時の配慮
	農業被害の発生	野生動物の個体数管理 防除対策の実施 有害鳥獣対策・外来種対策の実施
	外来種の侵入・繁茂（生態系被害の発生）	外来種対策の実施

表 3 地域別の生物多様性の主な問題点と課題（続き）

地域区分	主な問題点	課 題
⑧ 草花丘陵地域	樹林・草地の連続性の分断	土地利用改変（宅地化等）時の配慮
	樹林・草地の減少	
	二次林の荒廃	必要に応じた適正管理の実施 担い手育成
	谷津田生態系の衰退	
	水田及び跡地など水辺環境の荒廃	保全等の仕組み構築 農業振興 担い手育成
	農業被害の発生	野生動物の個体数管理 防除対策の実施 有害鳥獣対策・外来種対策の実施
	外来種の侵入・繁茂（生態系被害の発生）	外来種対策の実施
	河川環境の劣化（単純化）	河川管理のルールづくり 生物多様性への配慮

このほか、地域にまたがる課題としては、河川環境の向上が挙げられます。本市の象徴の一つである秋川は、ダムのない河川として、釣りやバーベキューなどの親水性が非常に高い河川となっています。一方で、河床の礫化や上昇などを懸念する声も聞かれるほか、レジャーなどによる河川敷の利用などが増えることに伴い、河原で営巣する水鳥への影響がみられます。

また、市域全体の課題として、生物多様性の取組を進めていくために必要となる生物多様性の状況の把握や調査の継続、生物目録*の充実、崖線の緑の連続性の確保、公共施設等の植栽における生物多様性への配慮などが挙げられます。

コラム13 様々な森の種類

私たちは木がまとまって生えている場所のことを樹林（森）と呼びます。樹林は、その成り立ちや状態によっていくつかの種類に分けることができ、本戦略では、次に示す樹林の区分を用いております。

【樹林の成り立ちによる区分】

区 分	解 説
原生林	人の手によって一度も伐採されたことのない樹林のこと。
自然林	自然の力によって成り立った樹林で、原生林や二次林も含む。
二次林	原生林が、伐採や何らかの影響で破壊されたあとに自然に成立する樹林のこと。
人工林	人の手によって、植栽された樹林のこと。多くの場合、成長後は伐採され木材とされる。植栽であることに着目して植林ともいう。
経済林	木材の経済的な利用を目的として、計画的に育成される樹林のこと。

【樹林の年齢（林齢）による区分】

区 分	解 説
幼齢林	成長の速い樹種で林齢 10 ～ 20 年、遅い樹種で林齢 30 年程度の樹林
若齢林	一般的に林齢 10 ～ 50 年の樹林
壮齢林	成長の速い樹種で林齢 20 ～ 50 年、遅い樹種で林齢 30 ～ 80 年の樹林
老齢林	成長の速い樹種で林齢 50 年以上、遅い樹種で林齢 80 年以上の樹林

